

道と平行に延びているという位置関係から中世以降のものとしておきたい。

#### 土坑(図206)

大形土坑はいずれも河道の肩口に位置している。SK01、02は河道からオーヴァーフローしたと思われる粗砂によって埋没している。

**SK01** 長軸の長さ2.95m、短軸2.32m。深さは北側で88cm、南側で47cmである。杭状の木製品が1点出土している。

**SK02** 調査区内で全体の1/2程度を検出した。東西1.93m、南北1.38m、深さは63cm。埋土は大きく三つに分かれる。下層に粘質土混じりの粗砂層が堆積した後に上、中層に河道からオーヴァーフローした粗~細砂層が堆積している。遺物は出土していない。

**SK03** ほぼ円形で主軸を南北方向にとる。南北2.06m、東西1.77m、深さ55cmである。埋土は細分はしているが暗灰~灰色が基調となっており、わずかに細砂層がレンズ状に認められる。SK01、02と違いがあるのは河道肩口から離れていることが影響しているものと思われる。遺物は古式土師器の壺の小破片が出土している。

時期は明確ではないが、埋土の状況から、ほぼ同時期のものと思われる。SK01、02は最終的に河道から供給された粗砂で埋まることからみて、遺構の時期は中世以降と考えたい。

図206 F1区SK01~SK03実測図 (S=1/40)

## 6. 繩文時代晚期（弥生早期）の遺構と遺物

中世以降の自然河道東岸の標高3.6~3.7mの基盤層を約10cm掘り下げた段階で、火處5基とその周囲に拡がる縄文晩期（弥生早期）の土器群、石器を検出した。遺構、遺物を検出した範囲は図207のa-dの範囲だが、火處5はその一部しか調査区にかかっていない。遺構、遺物とも調査区外の南～南東方向にも拡がっているものと考えられる。

層序（図197の上段、図208） 5基の火處はいずれも基盤層の中に入構面をもつ。しかしことんど同質の細砂層（風成砂層）<sup>(1)</sup>のため、平面的な調査では入構面として認識することはできなかった。基盤層は土層断面（CD、IJライン）を観察し、火處の面を手がかりとして細分（アルファベット小文字の番号）した。その結果をまとめると、次の通りである。

火處の面 = CDライン（図197上段） s層上面 = IJライン（図208） c層上面

平面的には確認できなかったが、火處の面は北東から南西に向けて傾斜している。その上に細砂層がかぶっており、その中に土器、石器が混ざっている。遺物包含層は次の通りである。

包含層 = CDライン r層、FGライン d・e層、HIライン c層

遺構の位置関係（図209） 火處1・2と火處3・4、火處5の三群に分かれる。火處1と2、火處3と4は近接しており、あたかも二つの火處がセットとなるかのようである。火處1と2は近接して存在し、検出面での標高は3.6m。その2.2m南に火處3と4が位置する。検出面の標高は3.5m。火處5は火處4の南西1.0m離れており調査区の一部にかかる。検出面の標高は火處3・4とほとんど同じで3.45m。

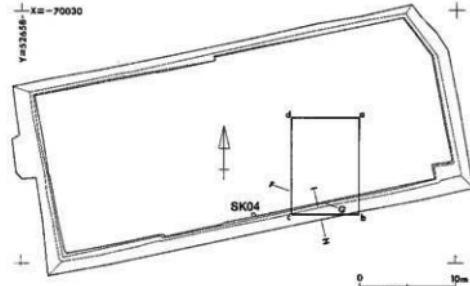
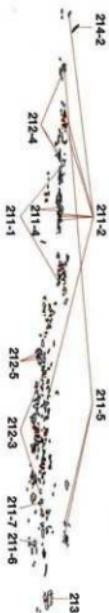


図207 F1区火處1～4調査地点 (S=1/500)



図208 F1区調査区土層堆積図 (4) - FG, HIライン - (S=1/40)



**遺構の概要** 平面形はさまざまだが、いずれも掘り形をもたないもので、被熱部分を中心として周辺に焼土・木炭粒が拡がっている（図のトーンの範囲）。炉として機能したものと考えられる。

**火処1** 最も熱を強く受けているのはBの部分であり、その影響を受けているのがA、C、Dの範囲である。Bの部分は47×27cmの範囲。焼土・木炭粒の拡がりを含めた範囲は大まかに長さ1.0m、幅93~36cmである。

**火処2** 52cm×42cm程度の範囲に木炭、焼土粒が拡がる。火処1と較べると木炭粒も少なく熱の受け方も弱い。

**火処3** 検出した火処の中では最も小規模である。37×30cmのいびつな方形部分に幅7.0cm、長さ24cmの突き出した部分がある。最も熱を強く受けているのは1の部分である。その東には熱を受けていない4の面がある。

**火処4** 90×67cmの範囲に木炭粉と焼土粒が拡がる。熱の受け方は火処1~3のように差がなかった。火処内には土器片が多数混ざっていた。

**火処と液状化現象（図210）** 火処1、2は北東から南西方向に延びる液状化現象の砂脈（幅5.0cm以内）で貫かれている。このことは縄文晩期（弥生早期）以降に震度5以上の大規模な地震があったことを示すものである。

**遺物の出土状況（図209）** 火処の周辺から約400点が出土している。図211の2、図212の2のようにその場で押しつぶされたような出土状況を示すものもあることから、周辺から流れ込んだものでないことは確かである。図209の接合関係を見ると広範囲に破片が散らばっているのが見て取れる。また火処の面は北東から南西に傾斜しているため、土器滴りも水平ではなく傾斜に合わせる形で拡がっているようである。個々に見てみると、図211の1、2は火処1・2の南側で固まって出土している。また図212の1は火処1・2と3・4の中間地点あたりで出土しており、破片は南西側に向けて拡がる。図212の2は図214の1の石杵の東側から火処4の辺りに破片が拡がるが、一点だけ火処1の北東2.5m離れた所で押しつぶされた大きな破片が見つかっている。

以上のような出土状態と土器に見られる使用状態と合わせて考えると、土器は火処（炉）で使用されたものであろうと思われる。

また石器は3点が離れた位置から見つかっている。出土状況については写真図版52に示している。組成として栽培具から収穫具までがセットである点は興味深い。

**縄文土器** 図211の1から7は突帯土器の深鉢。いずれも刻みつけない砲弾型一条壺である。1は復元口径32.4cm。鶴状のしっかりとした突帯がつく。外面はヘラ状工具による斜め方向のナデが施される。外面にススが付着する。2は復元口径34.2cm。外面にはヘラ状工具による斜め方向のナデが施される。胴部半ばから下位の外面は赤変している。3は突帯を口唇から1.0cm下に貼り付ける。4は逆台形の突帯が付く。外面は二枚貝によるナデ。5、6は口唇から0.5cm下に突帯が付く。7は口唇部を欠く。外面の一部に黒斑がある。

図212の1は屈曲型一条壺。突帯は口縁端部に接して貼り付け刻み目を施す。口径

26.3cm、器高18.9cm、胴部最大径25.9cm。胴部上半は二枚貝条痕のちナデ。下位はケズリ。内面はナデ。内傾接合の痕跡が明瞭に残る。2は深鉢。胴部上半と下半部が接合できないが図上で復元している。復元口径40.0cm、復元高27.0cm、胴部最大径27.0cm、底径11.0cm。胴部は「く」の字に屈曲する。外面は胴部上位が横、下位が縦から斜め方向のヘラミガキ、内面はナデ。口縁部と胴部最大径付近の外面の底部から胴部下位の内面にはコゲが付いている。特に内面には厚くしっかり

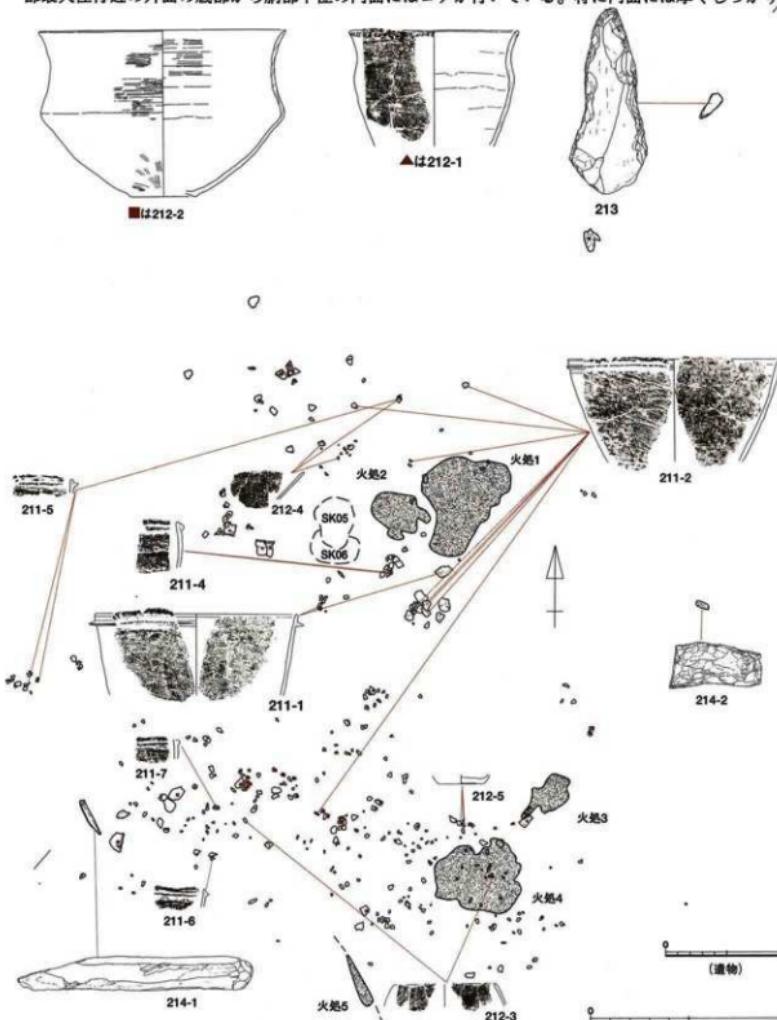


図209 F1区火葬1~4遺物出土状況実測図（遺構はS=1/50、遺物はS=1/8）

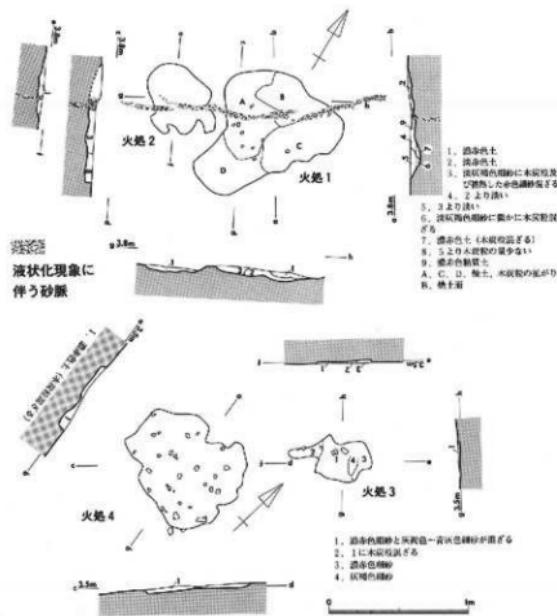


図210 F1区 火坑1～4 実則図 (S=1/30)



F 1 区火坑 4

と付着している。3は精製の鉢。内外面ともミガキを施す。4は浅鉢の口縁。外面に黒斑があり赤変した部分も見られる。4は底部。底径7.4cm。内外面ともナデ。

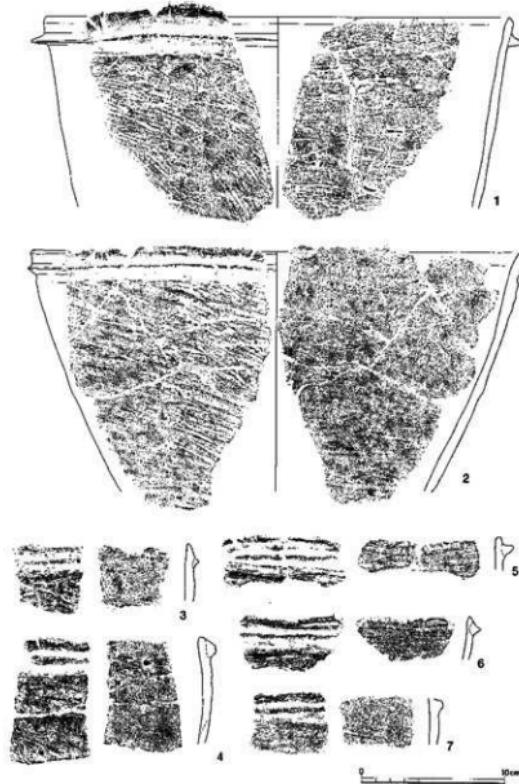


図211 F1区 火葬周辺出土遺物実測図(1) (S=1/3)

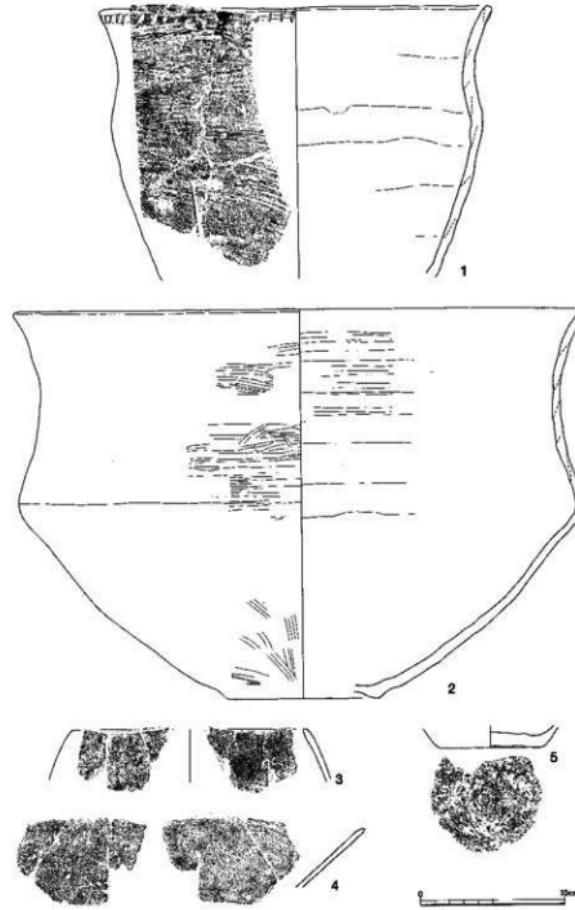


図212 F1区火处周辺出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

石器（図213、214） 石器はいずれも安山岩製である。図213は打製の石鎌。完全な形で残っている。スペード形を呈し刃部はV字形。長さ30.2cm、最大幅12.1cm、厚さ2.8~4.2cm、重量1336.49g。両面に自然面を残して両長辺を中心に加工する。刃部は両面から加工している。刃部は圓面の右側は使用により摩耗し光沢を放っている。図214の1は石杵。柱状節理の発達した材に加工しており鉛筆形をしている。全長37.9cm、幅5.1cm、高さ5.9cm、重量1587.24g。圓面の下端は使用により摩耗し光沢を放っている。3は打製石鎌。先端部（圓面左側）は欠けている。現状での長さ15.1cm、幅5.8~6.8cm、厚さは最大で2.4cm、重量317.40gである。表裏とも剥離面を残し刃部と背部に加工している。刃部は両面から加工している。

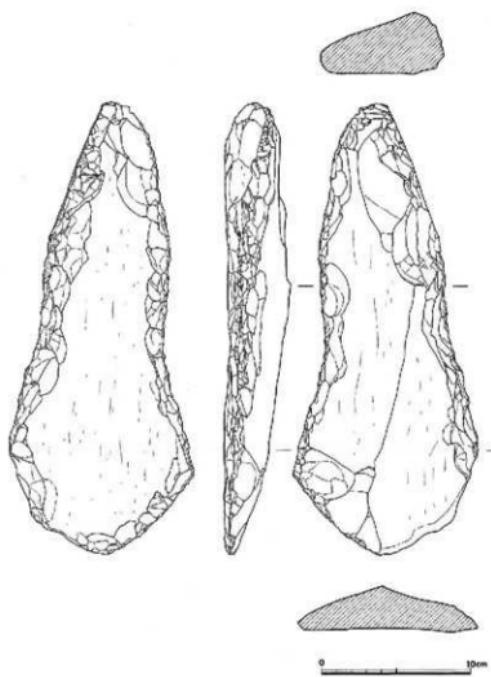


図213 F1区 火葬周辺出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

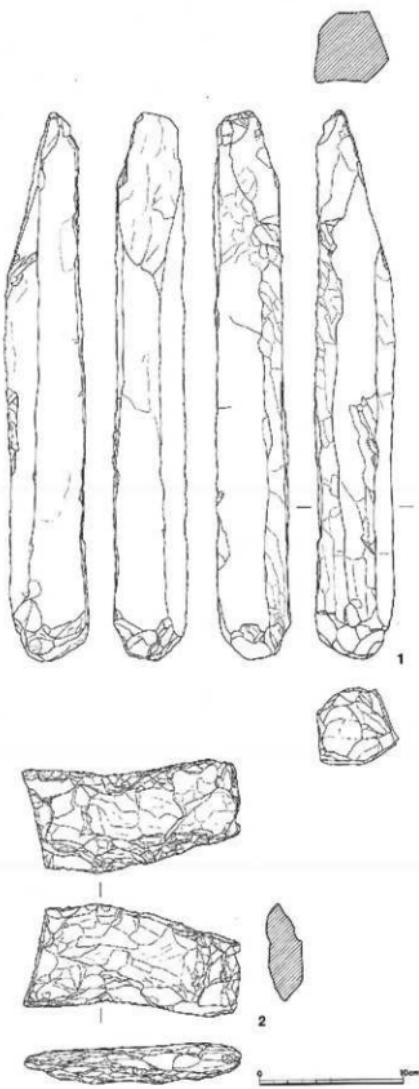


図214 F1区 火处周辺出土遺物実則図(4) (S=1/3)

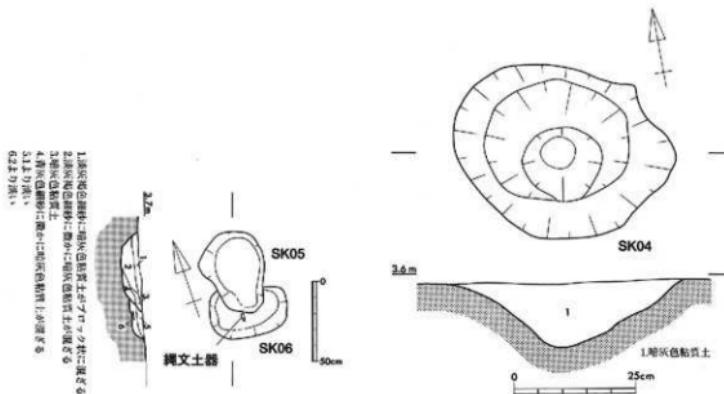


図215 SK04~06実測図 (SK04は=1/10、SK05・06は=1/30)

### 7. そのほかの遺構（図215）

S K04~06は、いずれも基盤層である淡灰褐色細砂層を掘り下げていく段階で検出した。そのため以下に記した計測値は検出面でのものである。S K05とS K06は切り合っておりSK06が古い。

S K04（図207） S D01の東1mに位置する小土坑である。長さ46cm、幅35cm。検出面からの深さは13cm。埋土は暗灰色粘質土で大形土坑のS K01~03に近い。遺物は出土していない。

S K05 長さ52cm、幅39~26cm、深さは12cm。覆土は四層に細分しているが、基本的には地山の淡灰褐色細砂に暗灰色粘質土がブロック状に混ざったものである。遺物は出土していない。

S K06 長さ48cm、幅28~31cm、深さ7cm。埋土は二層で、下層より縄文晩期（弥生早期）土器の破片が1点出土している。

遺構の時期は不明である。ただしSK04については理土の状況から見て中世以降の時期ではないかと思われる。

## 8. 小結

本調査区での成果としては次の2点が挙げられよう。

①中世から昭和30年代までの自然河道の変遷を明らかにできた。

②縄文時代晚期（弥生早期）の遺構と遺物を検出した。

このうち②については本書の藤尾慎一郎「中・四国地方の弥生I期突帯文系土器」(251~260ページ) のなかで述べられているので、ここでは触れない。以下①の問題を中心進めたい。

### 自然河道

#### 1. 河道の規模

小規模な河道である。最終的に削り込んだ東西の肩口の幅は9~14m。河道はこの間を時代とともに流れを変え最終的に川幅を固定されたようである。深さは最も深いところで0.8m、河道Aの底面で標高2.9mである。

#### 2. 河道の流向

聞き取り調査では旧古井手川段階は北東から南西方向に流れていたことがわかった。それ以前についても、河道底面の侵食、削り込みの跡（図200）から同様の方向であったと思われる。

#### 3. 河道の堆積環境

現地での自然科学的見地からの指導を受けておらず充分な検討はできないのが実情である。ただ南壁11~14層（図196）の土壤をサンプリングし花粉、珪藻分析を行ったところ、「沼沢湿地的環境」で「序々に埋まっていた」とことがわかった。サンプリングを行った自然河道東岸近くでは側方から序々に埋まっていたのであろう。

#### 4. 河道の時期

出土遺物から中世から昭和30年代までと考えられる。

#### 5. 河道への働きかけ

河道の西側に平行するように造られた大溝や杭列遺構、そして河道東岸の微高地上的溝跡（SD01~02）の存在などから考えて、この河道が流れている頃は、かなり積極的な人間の働きかけがあったことがわかる。

#### 6. 河道周辺の環境

花粉分析のデータは河道周辺で稲作が行われていたことを推定している。河道を固定、管理し農業用水をひくなどの土木工事をして、周辺を生産域として開発利用していた当時の景観が復元できよう。花粉分析ではソバ属も検出されており、当該期には稲作だけでなく蕎麦栽培も行われていたことがわかる。また河道内からは中世土器や漆器碗も出土していることから居住域もごく近いところにあったものと思われる。

（註） 基盤層の細砂は、中村唯史氏に分析して頂いた。平均粒径や淘汰度等の分析結果からは風成砂層という結論は導き出せないが、地層の顔つきから、風成砂層であることは確実であるとのことである。氏は、縄文晚期（弥生早期）には、晴れて風が強いと砂埃が舞い上がるようなところだったのではないか、と指摘する。

## 第2節 F2区

**概要** A、D・E1区に統いて弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した自然河道を検出した。さらに本調査区では、この河道が埋没した後の中世の河道も確認でき、河道の変遷について新たな知見を加えることができた。弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した河道の堆積層は未分解有機物の混ざった泥層を主体としたものである。これについては他の調査区の河道と同様である。次の中世の河道は粗砂層を主体としている。なお、粗砂～レキを主体とする中世の河道は東隣のF1区でも検出されている。中世の河道は二つの調査区の間をシフトしていたことがわかる。この点についてはF1区の調査成果と合わせて、最後の小結のところであらためて触れることしたい。

### 1. 自然河道（図216）

弥生時代末から古墳時代初頭の河道の肩口は調査区の対角線を結ぶように南東と北西で検出した。いずれも基盤層であるシルト層を割り込んでいる。両岸の間は幅30m。この間を河道はシフトしながら流れていたものと思われる。河道内の堆積土は未分解有機物混じりの泥層であり、ほとんど流れの無いよどんだ状態で埋没していったものと思われる。流向は流木の伸長方向や土層堆積状況から検討したが調査区内の知見のみでは判断できなかった。しかし東隣のF1区で検出された中世の

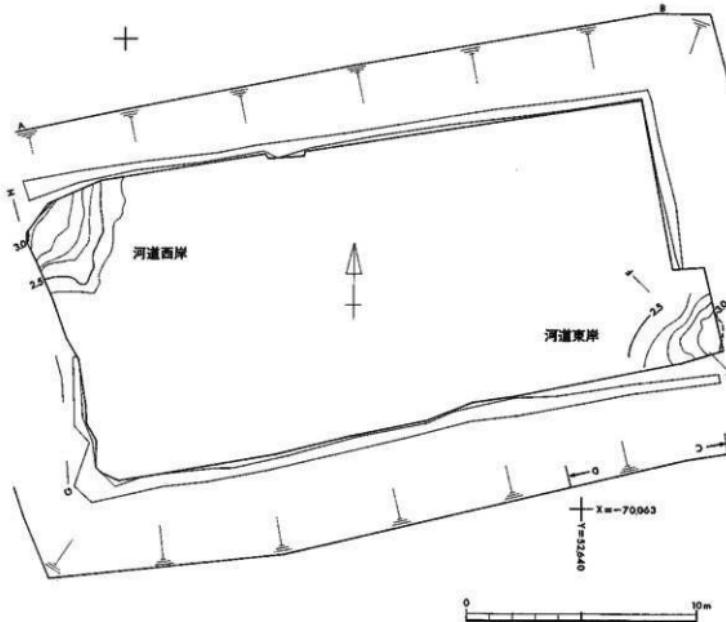


図216 F2区自然河道実測図 (S=1/200, 10cmセンター)

自然河道の流向が北東から南西方向であることから、本河道も同じ向きであったと思われる。河道の岸は調査区内の最も高いところが標高3.0mあり、なだらかに河道内に傾斜している。

弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した河道は、新たに粗砂層を主体とした中世の河道によって削り込まれている。この河道が流れていたのは、弥生時代末から古墳時代の河道の東肩口からさらに東の調査区外の辺りである。面的な調査では東肩口を覆う粗砂層（南壁27層）の堆積を確認したのみである。しかし南壁CDラインで見ると、27層は更に19層の粗砂層によって削られている。少なくとも2時期以上の変遷が認識できる。遺物は27層からは1点も出土していないが、19層からは図220の6の備前焼の壺が出土している。

2. 河道に伴う遺構 遺構としては河道内で数本の立ち杭を確認したのみである。杭は角杭が使用されていた。杭の頂部が失われているので、どの段階で打ち込まれたのかは不明である。杭は長いものでは1.0mを越えるものもあり、先端が河道底面の涌水層にまで到達しているものも見られた。またEFラインの3層直上で長さ80cm×幅70cmのおむすび形に括がる粉炭層（4層）を確認した。これは泥層直上であることから考えてこの地点で火が炊かれたものと推測される。河道の東岸が埋没した後の行為の痕跡である。

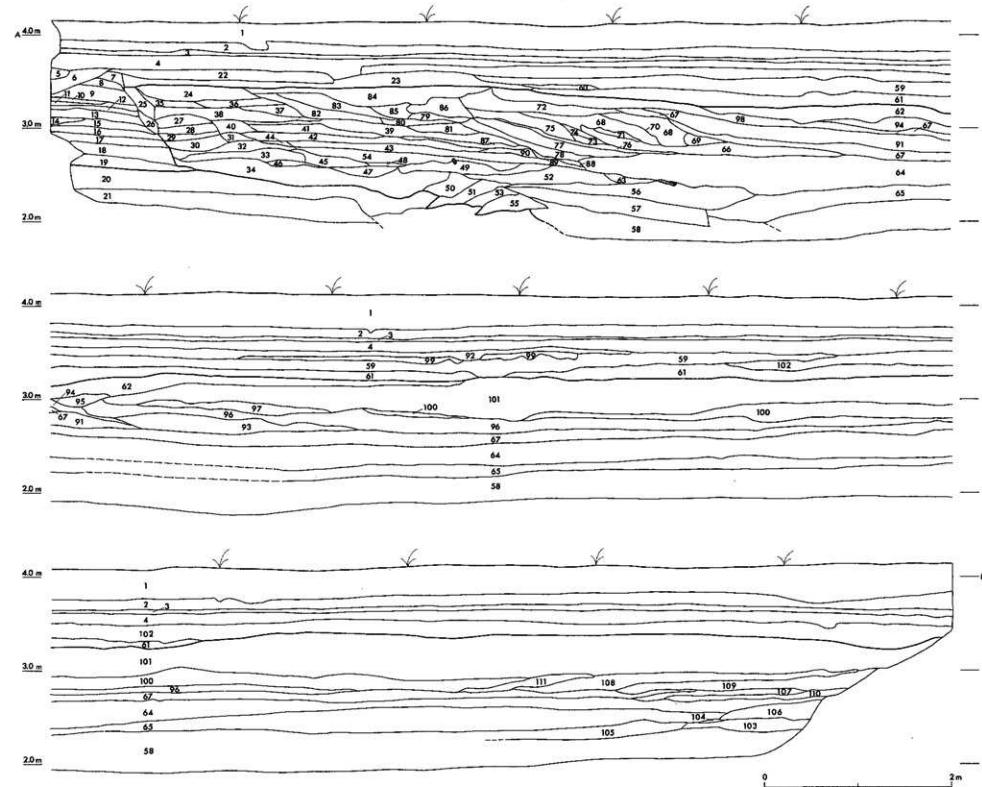
### 3. 自然河道内遺物出土状況（図219、写真図版54～56）

遺物は未分解有機物混じりの泥の層からほどんど絶て出土している。この層からは流木の類も多く出土している。その伸長方向を見ると北東から南西を向くものが多い。河道の流向を反映しているのであろう。泥層から出土していることや図220の5の弥生土器が押しつぶされたよう状態で出土していることから、遺物はそう遠くないところから投棄されたものと思われる。

なお、河道の中央部分の遺物の分布が散漫な印象を受けるが、これは河道底面まで完掘していなければある。



F 2 区 南壁土層堆積状況



1. 残土	14.よりしまる	33.青灰色土に細砂混ざる	47.黒色粘土	67.黒色粘質土と灰白色じり粘質土が混ざる	93.黒色粘質土上に細砂が混ざる
2. 黄褐色土	16.黄色粘質土	35.青白一青灰色土	48.灰白色沙粗粒じり粘質土	68.灰一灰黑色粘土のうミナ	94.灰褐色土に細砂が混ざる
3. 黄褐色土	17.灰褐色土	37.青白色土	49.条带状粘土	69.灰褐色土と細砂が混ざる	95.灰褐色土に細砂が混ざる
4. 黄褐色土	18.黄褐色砂質土	39.青白色	50.条带状粘土	70.灰褐色土と細砂が混ざる	96.灰褐色土に細砂が混ざる
5. 黄褐色土	20.黄褐色土	41.青白色	51.条带状粘土	71.灰褐色土上に灰白色細砂が混ざる	97.灰褐色土
6. 黄褐色土	21.黄褐色土	43.青白色	52.条带状粘土	72.灰褐色土上に青灰色細砂が混ざる	98.灰褐色土上に細砂が混ざる
7. 黄褐色土	22.黄褐色土	45.青白色	53.条带状粘土	73.灰褐色土上に細砂が混ざる	99.灰褐色土に細砂が混ざる
8. 黄褐色土	23.黄褐色土	47.青白色	54.条带状粘土	74.灰褐色土上に細砂が混ざる	100.灰褐色土に細砂が混ざる
9. 黄褐色土	24.灰褐色土	49.青白色	55.条带状粘土	75.灰褐色土上に細砂が混ざる	101.灰褐色土に細砂が混ざる
10. 黄褐色土	25.灰褐色土 (細粒度)	51.灰褐色土	56.条带状粘土	76.灰褐色土上に細砂が混ざる	102.灰褐色土に細砂が混ざる
11. 黄褐色土	27.灰褐色土	52.灰褐色土	57.条带状粘土	77.灰褐色土上に細砂が混ざる	103.灰褐色土に細砂が混ざる
12. 黄褐色土	28.灰褐色細砂 (灰白色砂質土) 1.5%混ざる	53.灰褐色土	58.条带状粘土	78.灰褐色土上に細砂が混ざる	104.灰褐色土に細砂が混ざる
13. 黄褐色土	29.青灰色土	54.灰褐色土	59.条带状粘土	79.灰褐色土上に細砂が混ざる	105.灰褐色土に細砂が混ざる
14. 黄褐色土	30.青灰色土と青白色土が混ざる	60.灰褐色土	61.灰褐色土	80.灰褐色土上に細砂が混ざる	106.灰褐色土に細砂が混ざる
		62.灰褐色土	62.灰褐色土	81.灰褐色土上に細砂が混ざる	107.灰褐色土に細砂が混ざる
		63.条带状粘土	63.条带状粘土	82.灰褐色土上に細砂が混ざる	108.灰褐色土に細砂が混ざる
		64.条带状粘土	64.条带状粘土	83.灰褐色土上に細砂が混ざる	109.灰褐色土に細砂が混ざる
		65.条带状粘土	65.条带状粘土	84.灰褐色土上に細砂が混ざる	110.灰褐色土に細砂が混ざる
		66.条带状粘土	66.条带状粘土	85.灰褐色土上に細砂が混ざる	111.灰褐色土に細砂が混ざる

図217 F2区土層堆積図 (1) (S=1/40)

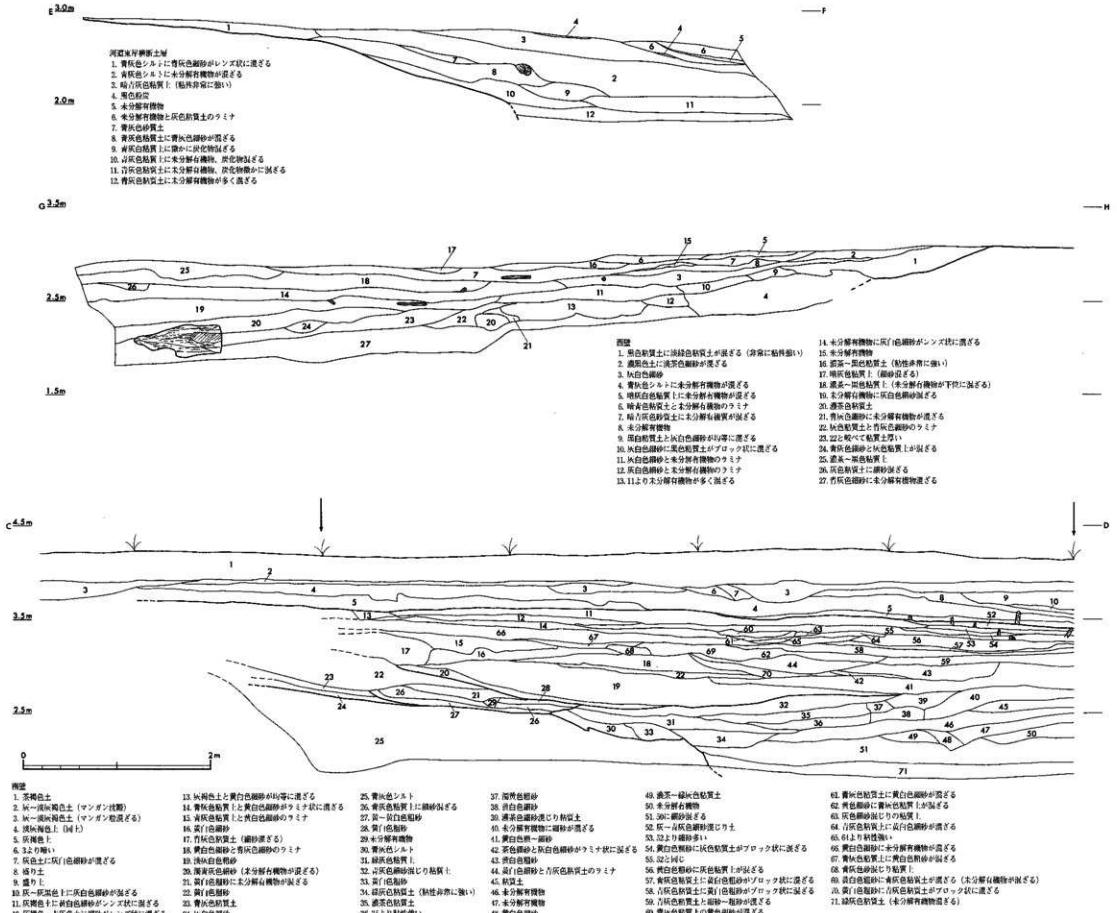


図218 F2区土層堆積図(2) (S=1/40)

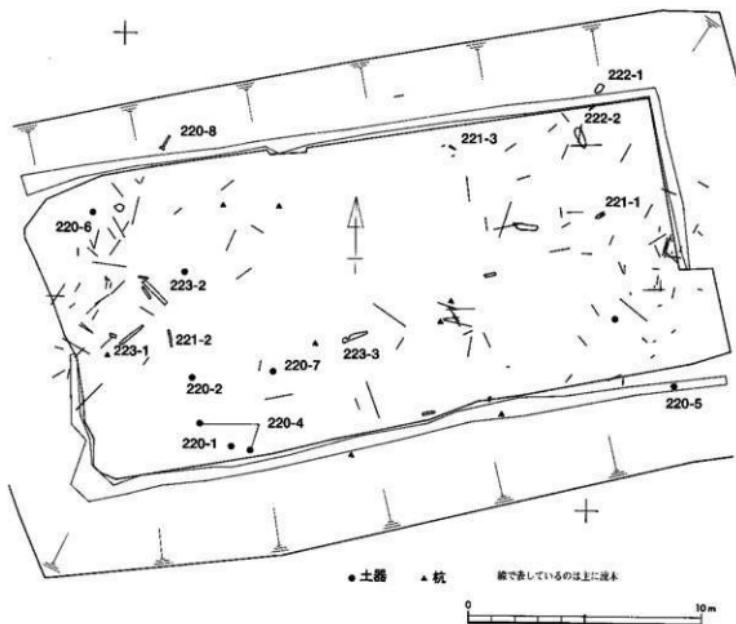


図219 F2区自然河道出土遺物実測図 (S=1/200)

#### 4. 自然河道出土遺物

##### 縄文土器・弥生土器・須恵器 (図220)

図220の1が河道西岸の基盤層直上から、7が粗砂層から、そのほかは、いずれも河道内の泥層から出土している。1は縄文土器。外面はナデ、内面二枚貝条痕のちナデ。2から5は弥生土器の複合口縁の壺。2は口径口径14.6cm。口縁端部は円くおさめ稜は鋭く突出する。外面はススが付着する。3は復元口径15.5cm。口縁は端部は平坦面をもち、稜は鋭く外方に突出する。肩部にハケ原体による平行沈線を施す。4は復元口径17.7cm。口縁端部は短く外方に折れ、稜は鋭く突出する。外面にはススが付着する。5は復元口径17.5cm。口縁部は厚みがあり端部に平坦面をもつ。胴部下半の内外面にススが付着している。6は高壺の受部。口径23.2cmの大形品。ゆるやかなカーブをもって立ち上り、口縁端部は外方に反る。内面は放射状、外面上半は横、下半は縱方向のヘラミガキ。時期は草田6～7期。<sup>(1)</sup>

7は中世河道にともなう南壁19層（粗砂層）から出土した。備前焼の壺の肩部。外面には波状の模様を施している。備前IV期か。<sup>(2)</sup>

##### 木製品 (図220の8～図223)<sup>(3)</sup>

図220の8は網枠。枝分かれした木の幹を柄にし、枝を折り曲げて枠にするタイプである。現在、枠部分を欠き柄も三つに分かれた状態である。現存長は76.0cm。柄は径2.0cm、枠は8mm前後。柄

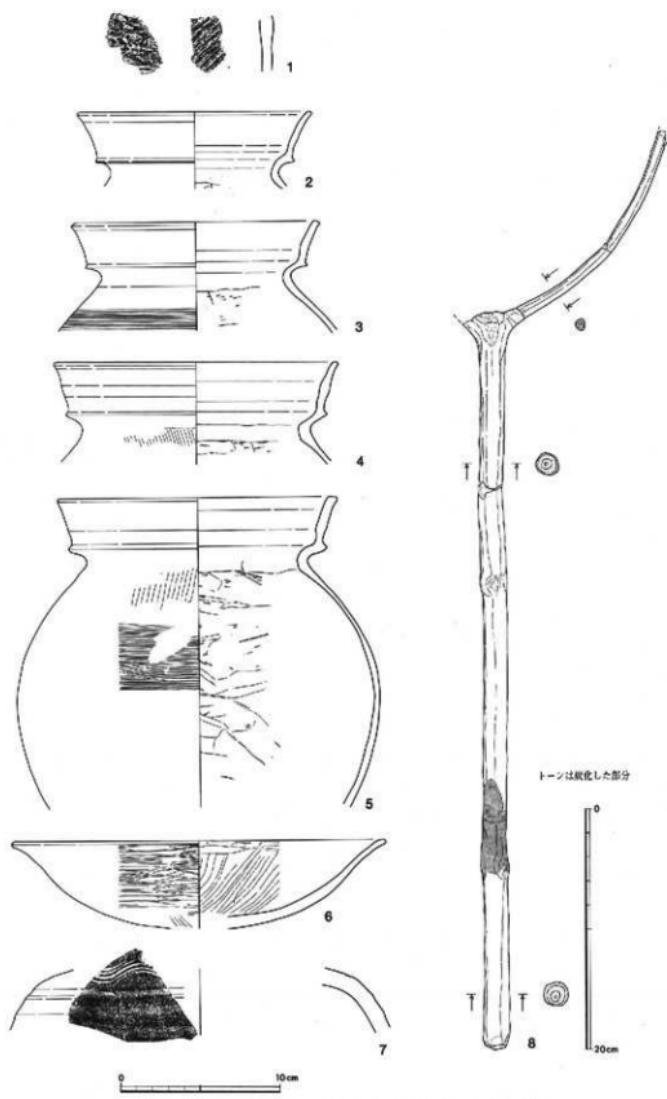


図220 F2区自然河道出土遺物実測図(1)  
(S=1/3、8はS=1/4)

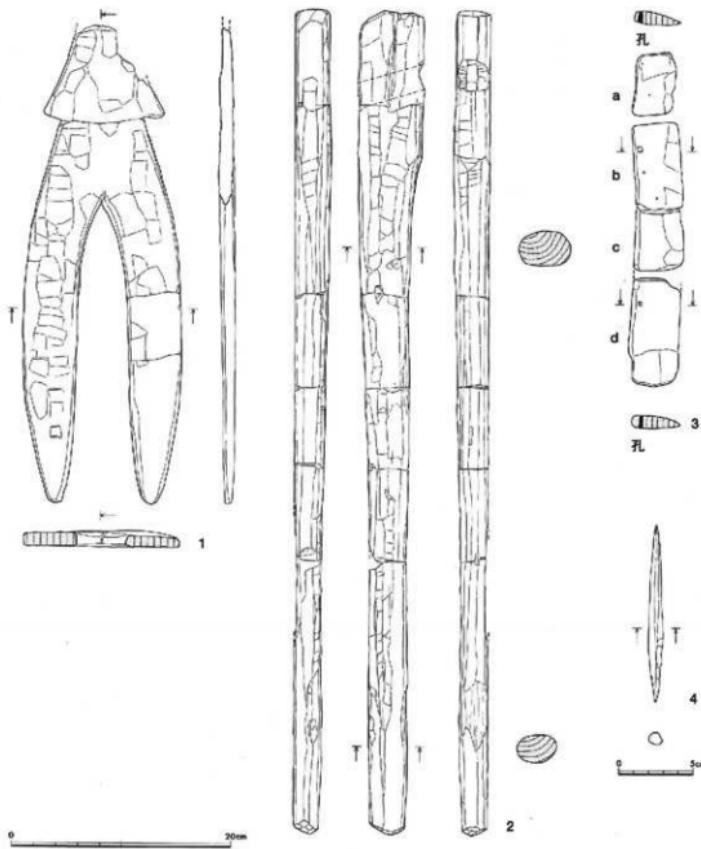


図221 F2区自然河道出土遺物実測図（2）（1~3はS=1/4、4はS=1/3）

は根元から1/3上位まで焦げている（図のトーン部分）。図221の1はナスピ形曲柄又鋸。笠部の一部と軸部を欠く。笠部は幅10.9cm、くびれ部の幅7.5cmである。刃部は両側が平行に延びる。最大幅は刃部の先端から上に14.3~16.8cmのところで14.3cm。刃部の厚さは1.0~1.2cmである。2は直柄縦斧。バラバラになつてはいるが頭部から握りの基部まで残っている。全長74.3cmと長大である。頭部は厚手で、長方形の着装孔をもつ。着装孔は幅2.2~2.3cm、高さ1.2cm。3は用途不明品。横断面が三角形になるように加工し刃部をもつ。現在、四つに分かれているが、磨滅しているためbとc以外は接合できない。断面幅4.3cm、厚さ1.2cm。bとdのパートには背近くに3mm角の方形の

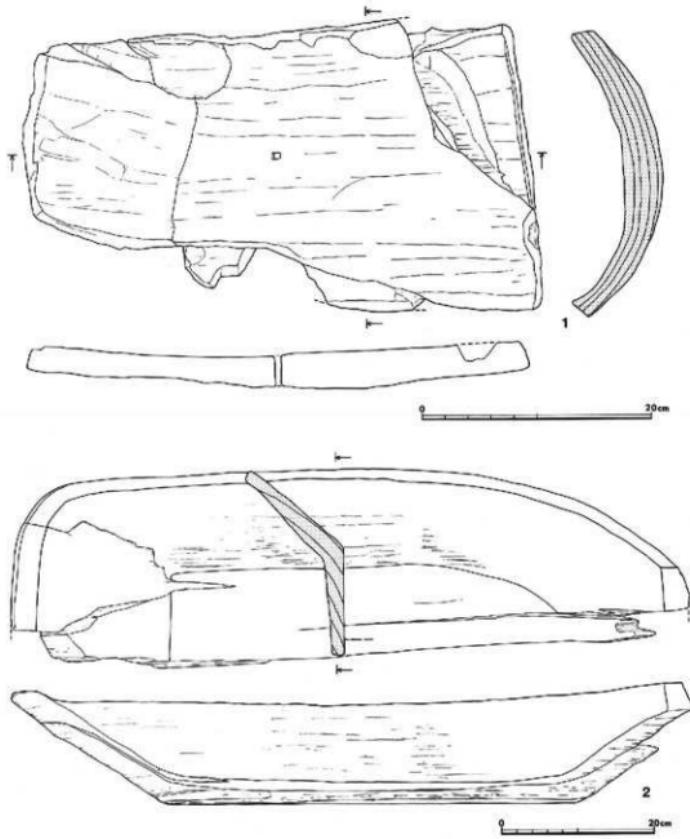


図222 F2区自然河道出土遺物実測図 (3) (1はS=1/4、2はS=1/6)

孔が空けられている。また a と c のパートにはそれぞれ 1 ~ 1.5mm 角の小さな孔が二孔一対で空けられている。穂摘具とするには大形であり、形状及び孔の配置も類例がない。4 も用途不明品。全長 12.0cm。幅 0.8cm、高さ 0.8cm。両端をとがらせており、断面はいびつな三角形をなしている。

図222の1は剣物の容器の側板かと思われるが、内面に突帯がないため、いわゆる剣物桶には該当しない。現在バラバラ状態となっているうえ、側縁のうち図の下側の一部と右下の部分が原形をとどめているのみである。複数の側板を組合わせて使用したものと思われる。ほぼ中央に 0.8 × 0.6 cm の長方形の孔が貫通している。2は槽。現在底面から体部にかけて、長辺と平行にヒビがあり、図の下側の部分はずれた状態となっている。法量は長さ 89.4cm、幅 25.5cm 以上、高さ 14.7cm の大形品。口縁部は短辺側が 2.8cm、長辺側が 1.4cm で短辺の方が厚い。底面は平坦である。

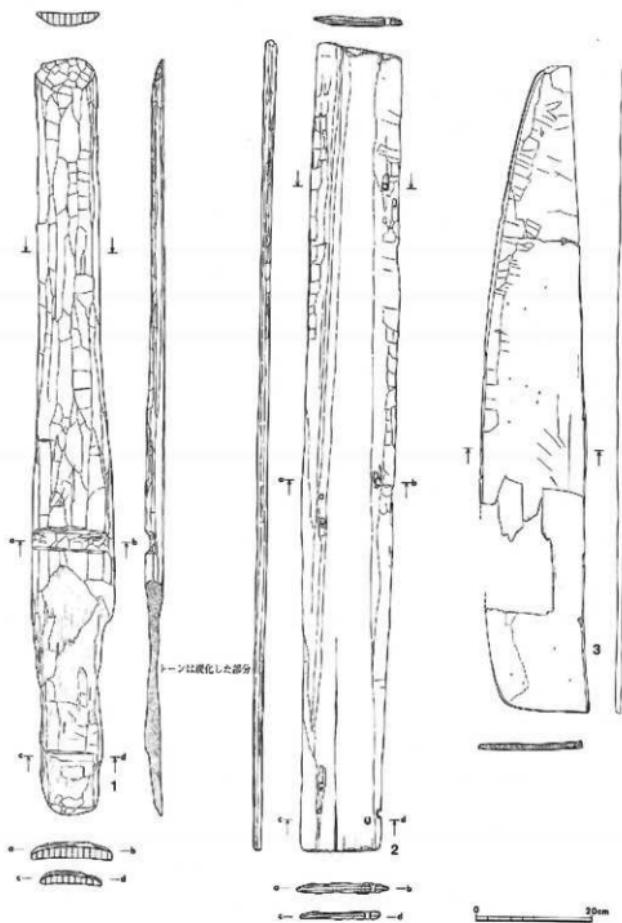


図223 F2区自然河道出土遺物実測図(4) (S=1/8)

図223は用途不明の大形の板材である。1は割取った板材の上下端を斜めに切り落とし、上面を円く削って蒲鉾形に仕上げたものである。全長149.3cm。幅は最も残りの良いところで13.9cm、厚さ3.2cm。a b ラインより下の部分は火を受けて焼け焦げている。a b、c d ラインのところには紐、縄をかけるための溝が掘られている。原形を留めている a b ラインのところで上面幅3.5cm、下面幅2.5cm、深さ0.9cmである。2は全長140.3cm、幅13.7~15.8cm。厚さは最大で1.5cm。横断面は木取りの関係でわずかに反っている。中軸線から左側には2孔一对の方形の孔が、右側にも方

形の孔が三つ空けられている。また、c d ラインの右側縁には方形の抉りもある。これらは複数の部材を紐によって結合するためのものと考えられる。側縁から表面には木理に直交するように幅3.0cm前後の工具痕が顕著に残っている。3は魚のヒレ状を呈する薄い板材である。図の左側縁下半を欠失している。全長は111cm、最大幅18.0cm。厚さは1.0~1.5cmと薄い。側縁は図の右側は垂直、左側は斜めに落としている。表裏とも平滑に仕上げている。

#### 4. 小結

弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した泥層主体の河道と中世の粗砂層主体の河道についてわかったことをまとめて小結としたい。

##### 自然河道～弥生時代後期初頭から古墳時代初め～

1. 河道の規模 小規模な河道である。最終的に削り込んだ東西の河道の幅は30m。深さは底面まで調査していないが深さ0.9m、標高は1.8m。

2. 河道の流向 土層観察や自然流木の伸長方向から検討したが明確には判断できなかった。しかし先のF 1 区の河道の流向を考慮すれば北東から南西方向への流れの向きが想定される。

3. 河道の堆積過程 河道内の堆積土は基本的に未分解有機物の混ざった泥の層である。花粉・珪藻分析の結果、これらは沼澤湿地環境で形成されたものであることわかった。<sup>(4)</sup> この河道は次第に干上がり埋没し湿地化していったのであろう。

##### 自然河道～中世以降～

1. 河道の規模 幅5 m前後か。F 1 区河道底面の標高は2.5m。F 1 区で検出された同時期の河道底面の標高は3.5mである。

2. 河道の流向 北東から南西。

3. 河道の堆積環境 粗砂～礫を主体としており洪水のような強い流水により供給されたものであろう。F 1 区の成果と合わせて見ると、粗砂層が、また次の粗砂層で削り込まれているのが確認出来ることから、増水が度々あったものと思われる。その後最終的に河道は固定され管理されていくようである。

自然河道は本調査区のほかにもA、D・E、F 1 区でその存在が確認できた。いずれの自然河道も弥生時代後期初頭に形成され弥生時代末～古墳時代初頭に湿地化していったようである。このことは当該期の出雲平野の土地利用と開発の歴史を考える上で貴重な情報といえよう。291ページからの「まとめ」で当該期の四絆遺跡群の様相も踏まえて二三の検討を加えることとした。

註（1）鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』 1992

（2）間壁忠彦『考古学ライブラリー60 備前焼』 ニューサイエンス社 1991

（3）木製品については次の文献を参考にした。

奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始編』 1993

（4）花粉・珪藻分析は調査区北壁の20、21、56、57、58、64、67、91の各層で行った。

#### 4. 考察及び自然科学分析



# 中・四国地方の弥生Ⅰ期突帯文系土器

## —出雲市蔵小路西遺跡出土土器の位置づけ—

国立歴史民俗博物館 藤尾 憲一郎

はじめに

本稿は、出雲市蔵小路西遺跡から出土した突帯文系土器の時間的位置づけについて論じたものである。突帯文系土器とは、弥生早期突帯文土器の系譜をひく壺のことと、九州の亀ノ甲式や下城式として有名な土器である。中・四国では1960年代から遠賀川系土器とともに出土する高知の入田Ⅰ式が知られていて、80年代以降には高知の田村Ⅰ式などの突帯文系壺も確認され、その存在はさらに確実なものになってきた。

出雲でも松江市西川津遺跡やタテヨウ遺跡で遠賀川系土器と一緒に突帯文土器が出土することが知られていたが、それは早期突帯文土器が残存したものなのか、それとも遠賀川系土器の影響を受けた突帯文系土器が遠賀川系土器と共に伴したものなのかという、性格をめぐった議論がおこなわれてきた。

そのようななか、蔵小路西遺跡で見つかった突帯文系土器は遠賀川系土器をともなわない状態で出土した。これらの土器の器面調整や器形は、早期突帯文土器よりも新しい傾向が認められるのに、遠賀川系土器が伴わない理由としては二つの可能性が考えられる。一つは遠賀川系土器出現以前に位置づけられるという点、二つ目が遠賀川系土器はすでに出現しているが、蔵小路西遺跡ではともなわないという点である。

そこで本稿では、出雲出土の突帯文系土器の特徴を明確にして、弥生早期とⅠ期という全体の枠のなかで蔵小路西遺跡で出土した突帯文系土器の時間的位置づけを試みる。その後、これらの土器が派生する問題として、突帯文系土器の集団ごとのあり方や出雲における遠賀川系土器の成立などについての見通しを述べてみたい。

### I 蔵小路西遺跡の突帯文系土器（図1）

蔵小路西遺跡から出土したのは突帯文系土器の壺と鉢である。壺には屈曲せず単純に底部にむかってすぼまる体部に、直口する口縁部をもち、口縁部外面に突帯を貼りつける砲弾型一条壺（5・11<sup>1</sup>）と、屈曲する体部に直口したり外反する口縁部をもち、突帯を口縁部外面に貼りつけた屈曲型一条壺（7）がある。それぞれ次のような特徴をもつ。

器形 屈曲型一条壺（7）の体部は強く屈曲する。胴部最大径が屈曲部にある点から、西部瀬戸内型〔藤尾1991a〕の屈曲壺に相当する。

口縁部突帯の位置 砲弾型一条壺の場合、口縁部の突帯は口縁端から下がった位置に貼りつけ（A）、屈曲型一条壺は口縁端に接して貼りつける（C）。5の突帯は、幅が広く高さもある点が早期突帯

<sup>1</sup> 11は、砲弾型一条壺と考えているが、後述する図2-7と口縁部の特徴が似ているため、屈曲型の可能性ものくる。

文土器とは異なる。

刻目の施文法 瘤弾型一条壺に刻目はないが、屈曲型一条壺にはヘラ状工具で中ぶりの刻目がつけられている。

器面調整 ヘラ状工具によるケズリ、もしくは粗いヘラナデが主体で、貝殻条痕も一部みられるが、遠賀川系に一般的な刷毛目はみられない。調整の方向は、体部下半が右下がりの斜め方向、体部上半が横方向で、縄文土器の条痕調整と同じ手法が用いられている。

色調 すべて暗黄褐色で、九州北部でいういわゆるⅠ期色を呈す。

その他 瘤弾型一条壺（11）の口唇部はつまみ出すようにして整形したあとナデるために先端が細く外反している。粘土帯はすべて内側接合で積み重ねられている。

以上のような特徴をもつ突帯文系土器の時間的位置付けを、出雲海岸部の突帯文系土器と比較しながらおこなう。

## II 出雲のⅠ期突帯文系土器（図1）

蔵小路西遺跡のある出雲の海岸部で突帯文系土器を出土する遺跡には、出雲市三田谷Ⅰ遺跡、鹿島町講武氏元遺跡、松江市タテチョウ遺跡、同西川津遺跡がある。これらの遺跡について簡単に説明しておこう。

講武氏元遺跡はⅠ期中段階の遠賀川系土器と突帯文系土器が包含層から混在して出土したことでも知られている〔赤澤編1989〕。調査をおこなった赤澤秀則は、遠賀川系に混在したのは縄文晩期（筆者の弥生早期）の突帯文土器と理解する。出土した突帯文系土器は壺だけで浅鉢は出土していない。

壺は瘤弾型一条壺と屈曲型一条壺で、いわゆる二条壺は出土していない。この中で注目されるのは13である。屈曲部がこれほど下位にある壺は今のところ出雲でしかみられない。

氏元から出土した突帯文系土器の時間的位置づけに議論がある。赤澤は遠賀川系土器との共伴には慎重で、同時使用の可能性については保留している。これに対して柳浦俊一〔柳浦1994〕や松本岩雄〔松本1992〕は共伴という理解にたつので、Ⅰ期中段階併行の突帯文系土器という時間的位置を主張する。ただし柳浦は氏元の突帯文系土器について、早期突帯文土器が遠賀川系土器の影響を受けて成立したものと理解し、早期突帯文土器の最終末に位置づけ、あくまでも早期突帯文土器の範疇の中で考えている。

氏元で出土した突帯文系土器の性格についてはなお議論しなければならないが、氏元の調査成果によって出雲の突帯文系土器の下限を押さえることができる。

タテチョウ遺跡では早期突帯文土器と突帯文系土器が出土している。このうち突帯文系土器は古・中段階の遠賀川系土器と混在して出土した。器種構成は氏元と同じだが、器面調整に大きな違いがある。氏元の突帯文系土器はナデ調整だが、タテチョウでは刷毛目調整が用いられている。これは高知県田村遺跡や岡山市津島遺跡南池地区出土で出土した、弥生化した突帯文系土器と呼ばれているものと同じである。

西川津遺跡でも早期突帯文土器と突帯文系土器が出土し、やはり突帯文系土器は古・中段階の遠賀川系土器と混在して出土している。器種構成はタテチョウと同じである。器面調整は氏元と同じく刷毛目調整が施されずナデ調整で仕上げる。近接するタテチョウとは器面調整を異にする点が注

## 在地系突帯文土器

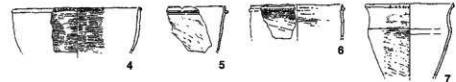


タテチョウ遺跡 1・2・8・9・14～17・21～23・25・26

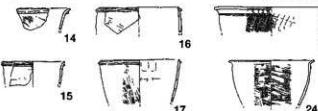
西川津遺跡 3・4・12・18・19・24

故小路西遺跡 5・7・11

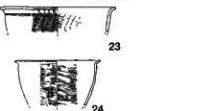
説武氏元遺跡 6・10・13・20・27



## 変容系突帯文土器



## 遠賀川系土器



## 外来系突帯文土器

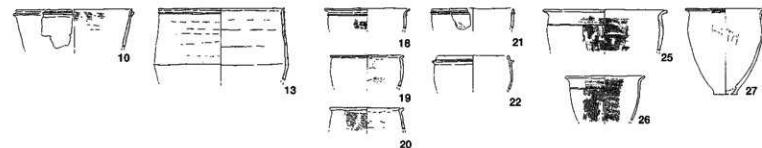


図1 出雲の突帯文系土器 (S=1:8)

目される。実見したところタテチョウに比べて遠賀川系土器に対する突帯文系土器の割合がやや低いという印象を受けた。

これらの遺跡から出土した突帯文系土器と藏小路西遺跡の突帯文系土器を比較検討すると、詳細な検討結果は別稿〔藤尾2000〕に譲るが、出雲平野部の突帯文系土器は四つのグループにまとめられることがわかった。いずれも器種は屈曲型一条壺と砲弾型一条壺で、二条壺がないのは出雲の地域性である。

まず藏小路西遺跡で出土した突帯文系土器である。屈曲型一条壺（7）は、まだ明瞭な屈曲部を残し、突帯を口縁端部に接して貼り付ける。条痕調整である。砲弾型一条壺（5）は、口縁端部から下がった位置に大きな突帯を貼り付け、刻目をつけない。いずれも粗いヘラナデ調整で仕上げる。遠賀川系土器は伴わない。これらを藏小路西型と仮称しておく。今のところほかの遺跡では類例がない。

二つ目はタテチョウ遺跡で出土した弥生化した突帯文系土器である（14～17, 21）。刷毛目調整で仕上げるものとナデ調整で仕上げるものがある。遠賀川系壺と同じく縱方向に刷毛目調整する17と、条痕調整と同じく横方向に刷毛目調整する14がある。粘土帯の接合面が外傾か内傾かは特定できなかった。口縁部の突帯は、口縁端部から下がった位置に貼り付けるもの（14）とわずかに下がった位置に貼り付けるもの（15, 17）、接するもの（16）などさまざまである。刻目はヘラや刷毛目調整具によってつけられたもので、小ぶりで定型化している。I期古・中段階の遠賀川系土器と混在して出土する。これらをタテチョウ型と仮称する。

三つ目が氏元遺跡で出土した突帯文系土器である。ナデ調整で仕上げる。口縁部の突帯は口縁端部から下がった位置に貼り付け、刻目はつけない。口唇部を先細り気味に仕上げる。口唇部をこのように仕上げるものは、藏小路西遺跡でも出土する（11）。ただし、器面調整が異なり、藏小路西の方が古い様相をみせる。13は先述したように出雲でしかみられない。I期中段階の遠賀川系土器と混在して出土する。これらを氏元型と仮称する。

四つ目が藏小路西遺跡以外の三遺跡で出土した突帯文系土器である。口縁部の突帯はすでに平坦口縁に発達し（19）、いわゆるI期中・新段階の瀬戸内壺に近似するものの（20）、口縁部の突帯を口縁端部から極端に下がった位置に貼り付ける、東部九州の下城式に近似する22、14から型式変化した屈曲一条壺系の18がある。ナデ調整で仕上げ、刻目は定型化した小ぶりのものである。出雲の瀬戸内壺はヘラ描沈線をもたず壺組成に占める割合も1割以下と非常に少ないので特徴である。これらを外来型と仮称する。

これらの中では型式学的特徴からみて早期突帯文土器に近い特徴をもつ7がもっとも古く位置づけられる。7が出土した藏小路西遺跡では出土状況から5, 7, 11の間に時期差はないとみられていることから、藏小路西型がもっとも古いと考えてよいだろう。また瀬戸内壺や下城式に類似する外来型がもっとも新しく位置づけられよう。問題はタテチョウ型と氏元型である。

タテチョウ型は器面調整や成形法に遠賀川系土器の影響を受けていること、屈曲型一条壺の屈曲の痕跡をもつ体部、丁寧なナデや刷毛目といった調整、小振りで定型化した刻目などに、早期突帯文土器より新しく、瀬戸内壺や下城式より古い特徴をみることができる。したがって両者の中间に位置づけることができよう。

つぎは遠賀川系の影響をうけていないという点で藏小路西型と共通する氏元型の位置づけである。

発色や器面調整は異なるものの、口縁部の作りはきわめてよく似ている。ただ先述したように粗いヘラナデ調整の蔵小路西型と丁寧なナデ調整の氏元型では、後者が新しい傾向をもっていることは否めない。そこで、器面調整をもとに蔵小路西型→氏元型という前後関係を想定する。その結果、遠賀川系土器の直接的な影響がみられない突帯文土器は、早期突帯文土器→蔵小路西型→氏元型・瀬戸内甕と時間的に変遷する。

タテチョウ型の位置づけは先に示したように早期突帯文土器と外来型の間に考えられたが、他地域に存在する弥生化した突帯文系土器との対応からさらにしばりこむこととする。

### III 出雲出土突帯文系土器の時間的位置づけ

突帯文系土器と遠賀川系土器との出土状況は、タテチョウ型、瀬戸内甕がⅠ期古・中段階の遠賀川系土器と、氏元型が中段階の遠賀川系土器と混在して出土している。いずれも包含層からの出土で、明確な共伴とはいえないで他地域と比較をしてみる。

タテチョウ型は器形、刷毛目調整とも先述した田村I式や津島遺跡南池地点出土のいわゆる弥生化した突帯文系土器と同じ特徴をもつて、Ⅰ期古段階を下限とする時期におさまるとみられる。

難しいのは他地域に類例がない氏元型と蔵小路西型の位置づけである。

氏元型は、出土状況を重視すればⅠ期中段階を下限とする時期と考えざるを得ない。すると沢田式より新しく氏元型より古い特徴をもつ蔵小路西型はⅠ期古段階を下限とする時期に位置づけられることになる。

そこで、先に仮設定した突帯文系土器を次のように設定する。

出雲の突帯文系土器には、早期突帯文土器から変化していく在地系ともいえる系列と、遠賀川系土器の影響を強く受けた変容系ともいえる系列の二つが存在した。在地系は早期突帯文土器→蔵小路西型→氏元型と変化し、変容系はタテチョウ型のみ存在する。そして瀬戸内の影響を受けた外来系といってよい瀬戸内甕が最後に登場する。

このうちタテチョウ型は他地域との関係からⅠ期古段階を下限とするⅠ期前半に、瀬戸内甕は中・新段階に位置づけられる。在来系では出土状況を重視すれば氏元型が中段階に、氏元型より古い特徴をもつ蔵小路西型は古段階を下限とする時期に位置づけられよう。

以上、他地域の状況も含めた中・四国地方の突帯文系土器の編年は表1のようなものになる。

表1 中・四国地方の突帯文系土器編年表

系統・地域 時期	突 带 文 系 土 器		遠賀川 系土器	瀬 戸 内	高 知	九 州 北 部
	在 地 系	変 容 系				
早 期	三 田 谷 I	×	×	×	岡大・沢田	夜臼II・板Ia
I 期 古	蔵 小 路 西 型	タ テ チ ョ ウ 型	×	○	津島 I・II	田 村 I・II
I 期 中	氏 元 型	×	瀬 戸 内 甕	○	高 尾	田 村 III
I 期 新	×	×	瀬 戸 内 甕	○	門 田	田 村 IV
						板 IIc

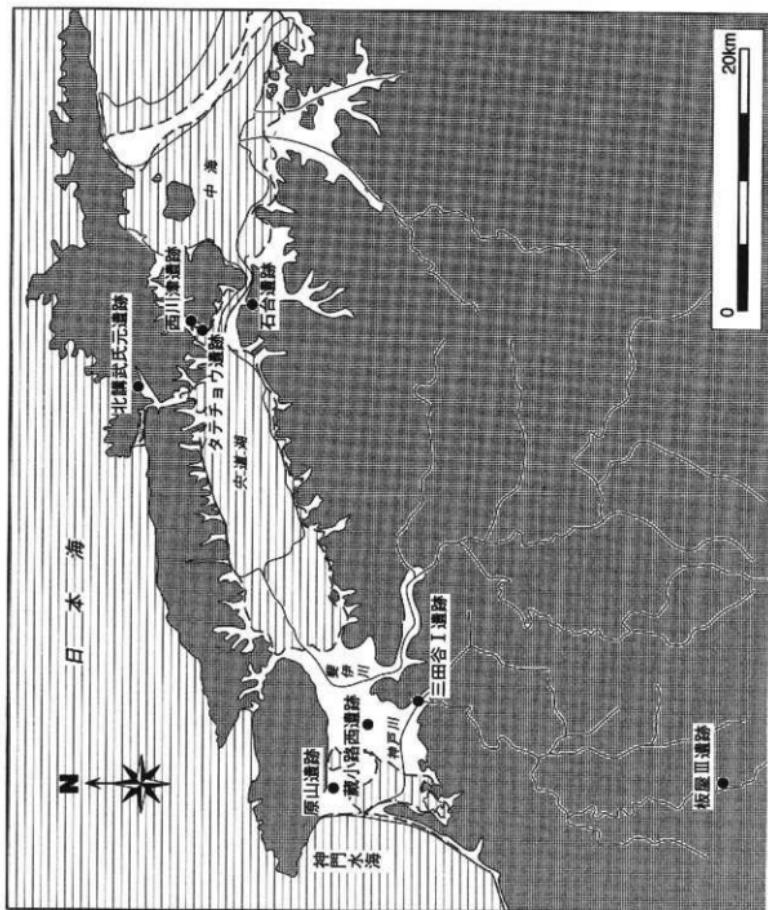


図2 遺跡の位置

古地理の説明

宍道湖湖底ボーリングの検討などから、出雲平野が拡大して島根半島と地続きになり、現地形の原形が形成されたのは、縄文時代後期から弥生時代までの間と推定される。上図では、当時の推定地形を破線で示している。(白抜き部は沖積地、網かけ部は山地および台地)

中村 唯史

### III 派生する問題

以上述べてきたように、出雲平野東部では遠賀川系土器の出現と同時に早期突帯文土器を母胎に弥生化した、変容系の突帯文系土器（タテチョウ型）が成立した。しかしこの型がみられる遺跡は今のところタテチョウ遺跡に限られており、近接する西川津遺跡にもみられないほど偏在的な分布を示す。かたや同時期の出雲平野西部には弥生化しない在来系の突帯文土器（蔵小路西型）が成立し、遠賀川系土器とともに存在する。中段階になると在来系は氏元型に変化し、出雲西部にもようやく遠賀川系土器と伴う遺跡が現れるようになる。変容系はもはやこの時期までは存続せず、そのかわりに瀬戸内壺が壺組成の1割以下の割合で伴うようになる。

出雲におけるこのような突帯文系土器の展開は二つの問題を派生する。一つが当該期における住み分け説、もう一つが遠賀川系土器成立に関する問題である。どれも詳細は別稿に譲るが概要を述べておく。

#### 1 住み分け説

かつて福岡平野や岡山平野で指摘したように、集団ごとの壺組成の違いが出雲平野でも指摘できる可能性がある。すなわち、遠賀川系土器と突帯文系土器を用いる人びとが生態的地位を異にする離れたところに集落を構え、相互交流していたという住み分け説である〔藤尾1991b〕。

図2は、復元した出雲平野の古地形上に当該期の遺跡を落としたものである。平野の西端には日本海に沿って古砂丘があり、その背面（東側）には「神門水海」とよばれるラグーン、そしてそれにそそぐ込む河川沿いの丘陵や段丘上に遺跡が乗る。まさに九州北部玄界灘沿岸地域の初期水稻農耕集落の立地、地理的条件と共にしたものを見てもみることができる。

出雲平野西部の集落分布を概観すると、神戸川の上流から順に、中国山地にいたかれた板屋Ⅲ遺跡〔角田1998〕、山地と平野の境界付近にある三田谷Ⅰ遺跡、平野の段丘上に位置する蔵小路西遺跡、砂丘上の原山遺跡となる。出雲平野東部でも宍道湖沿いに分布する西川津遺跡、タテチョウ遺跡、石台遺跡、海岸からはいった沖積地に位置する氏元遺跡となる。

これらのうち、平野部の諸遺跡におけるI期古・中段階における壺組成をみると、遠賀川系土器単純の原山遺跡、遠賀川系土器と突帯文系土器がともに出土する西川津、タテチョウ、氏元遺跡、突帯文系土器単純の蔵小路西遺跡が、存在していることがわかる。なかでもタテチョウ遺跡だけに変容系の突帯文系壺がみられた。したがって原山遺跡やタテチョウ遺跡には非在地の人びとがはいりこみ、蔵小路西遺跡のような集団と住みわけていた可能性を指摘しておく。

#### 2 遠賀川系土器の成立

近年、話題になっている遠賀川系土器瀬戸内起源説と出雲との関係である。この仮説は、高橋謙〔高橋1987〕、出原恵三〔出原1994〕、平井勝〔平井1995〕、豆谷和之〔豆谷1995〕らによって説かれているものである。瀬戸内の遠賀川系土器は、福岡平野の板付I式の影響のもとに成立したのではなく、西部瀬戸内から中部瀬戸内にいたる地域で朝鮮中期無文土器の直接の影響のもと独自に成立したもので、逆に板付I式こそ瀬戸内の遠賀川系土器の影響を受けて遅れて成立したという骨子である。

その根拠はいくつかあるが、彼らが重視するのは瀬戸内の遠賀川系壺が朝鮮無文土器の壺の製作技法をそのまま受け継いでいる点である。すなわち外反口縁と外傾接合は、板付I式に系譜をもとめることはできないこと、また瀬戸内の早期突帯文壺にみられる文様などの要素が遠賀川系壺の成

立に大きな影響を与えていたことなどを模擬に板付Ⅰ式に系譜を求める必要はないし、できないという考えである。

当初は、朝鮮無文土器と遠賀川系壺をつなぐいわゆる祖形壺などの提示もない実証性にかける議論であったが、豆谷が祖形壺の候補をあげたり、平井が板付Ⅰ式より遠賀川系土器が古いことの証明を試みるにあたり、ようやく検証できる仮説になりつつある。今後、これらの議論が活発化していくことだろう。99年1月には考古学研究会主催で西日本の弥生文化成立に関するシンポジウムも予定されている。もう少し材料が出そろってから検討したいと思うが、今いえることを一つだけ指摘しておく。無文土器から板付Ⅰ式成立への過程がもっとも明瞭に示されているのは玄界灘沿岸地域だけという事実である。少なくともこれと同じレベルの遠賀川系土器成立過程を実証する必要がある。

筆者も西日本の遠賀川系土器は、外來の文化（九州・半島）の影響を受けつつ、それぞれの地域の地理的・歴史的伝統の上に成立したと論じたことがある。その証拠として早期突帯文土器と遠賀川系土器の地域性を示す範囲に変化がみられないことをあげておいた〔藤尾1991b〕。この状況は出雲でも同じなのである。

またタテチョウ遺跡などで弥生化した突帯文系壺が出土している以上、出雲も遠賀川系土器が最初に成立した候補の一つとすることができよう。中期無文土器も講武氏元遺跡で見つかっているので、遠賀川系土器が成立する条件は岡山平野などと同等と考えられる。しかし、祖形壺は存在せず、無文土器と遠賀川系土器との型式学的欠落は今なお埋められる状況ではない。今後の調査を待ちたい。

#### おわりに

本稿は、1997年度、島根県埋蔵文化財調査センターのご厚意により蔵小路西遺跡から出土した資料を見せていただいた際の記録をもとに書き起こしたものである。資料の実見にあたっては同センターの足立克己・間野大丞氏や鹿島町教育委員会の赤澤秀則氏にご便宜をはかっていただいた。岡山平野の土器編年の現状については小林青樹氏から教示をうけた。末筆ながら謝意を表したい。

（1999年1月20日　校了）

## 参考文献

- 赤澤 秀則編 1989：北講武氏元遺跡。講武地区県営圃整備事業発掘調査報告書4。鹿島町教育委員会。
- 角田 徳幸 1998：板屋Ⅲ遺跡、志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5。
- 高橋 謙 1987：遠賀川式土器、弥生土器Ⅱ、7-16、弥生文化の研究4、雄山閣出版。
- 出原 恵三 1994：四国西南部における弥生文化の成立。文化財学論集、229-240、奈良大学。
- 平井 勝 1995：岡山平野における遠賀川系土器の出現—津島遺跡南池地点出土土器の再検討—。古代吉備17、20-33。
- 藤尾慎一郎 1991a：水稻農耕と突帯文土器。日本における初期弥生文化の成立、187-270、文献出版。
- 1991b：水稻農耕開始期の地域性。考古学研究38(2)、30-54。
- 2000：出雲平野における弥生文化の成立過程—突帯文系土器からみた出雲の特徴—。国立歴史民族博物館研究報告(印刷中)。
- 豆谷 和之 1995：I期弥生土器出現。古代 48-73、早稲田大学。
- 松本 岩雄 1992：出雲・隠岐地域、弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—。木耳社。
- 柳浦 俊一 1994：島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要—飯石郡頼原町森遺跡出土土器を中心～。島根考古学会誌11、25-38。

# 蔵小路西遺跡の植生環境及び便所遺構総合分析

金原正明 金原明子

## 1.はじめに

過去の植生を調べるには、花粉分析などの単一の分析で行うより、他の植物遺体を総合的に分析することにより詳細な植生を復元することが可能になる。また、便所遺構などの遺構の性格は、寄生虫卵分析を含む総合分析によって検討を加えることが可能である。

蔵小路西遺跡においては、土坑から、ちゅう木とみられる木製品が出土し、便所遺構の可能性がもたれ、堆積物の寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定分析を行い、検討を加える。

## 2. 試料

試料は土坑1、土坑9の2遺構でそれぞれの3点の計6試料である。以下に試料を一覧する。

表1 蔵小路西遺跡B2区における試料一覧

試料番号	遺構名	土層説明	備考
1	土坑1	第9層灰褐色～茶褐色土	東西セクションベルト
2	土坑1	第13層未分解有機物	タ
3	土坑1	第17層茶色土	タ
4	土坑9	第7層茶色土	タ
5	土坑9	第9層灰～青灰色粘質土	タ
6	土坑9	第22層暗茶色土	タ

## 3. 寄生虫卵分析

### (1) 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- サンプルを採量する。
- 脱イオン水を攪拌する。
- 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 25% フッ化水素酸を加え30分静置。(2~3度混和)
- 水洗後サンプルを2分する。
- 片方にアセトリシス処理を施す。
- 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学的各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるとするという操作を3回繰り返して行った。

## (2) 結果

低密度の寄生虫卵が検出された。いずれの試料も試料(1cc)中に100個未満であった。土坑1からは回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵、土坑9からは回虫卵、異形吸虫卵が検出された。明らかな植物残渣は検出されなかった。

## 4. 花粉分析

(1) 花粉粒の分離抽出は、基本的に中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの筒で碟などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分間放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にし、現世標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

## (2) 結果

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉19、樹木花粉と草木花粉を含むもの1。草本花粉23、シダ植物胞子2形態の計45である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

#### 〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雜管束亞属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、サンショウウ属、トチノキ、カキ属、ニワトコ属-ガマズミ属

#### 〔樹木花粉と草本を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

### [草本花粉]

ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ属、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、スペリヒユ属、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、アリノトウガサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、センブリ属—ツルリンドウ属—リンゴ属、ナス科、オオバコ属、タンボボ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

### [シダ植物胞子]

單条溝胞子、三条溝胞子

### 2) 花粉群集の特徴

検出された花粉群集は、土坑1、土坑9とも同じ構成を示す。樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高く、草本花粉のイネ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、オオバコ属、チドメグサ亜科の出現率が高い。他に草本花粉ではアブラナ科、ソバ属などが出現する。樹木花粉は低率で、マツ属複維管束亞属、スギなどが出現する。他にクワ科—イラクサ科の出現率がやや高い。

## 5. 種実同定分析

### (1) 方法

試料（堆積物）を秤量し、0.25mm目の飼を用いて水洗選別を行い、実体顕微鏡によって観察を行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は、科、属、種の階級の分類群と部位で示した。

### (2) 結果

#### 1) 分類群

同定の結果、草本ばかり以下に記す18分類群が検出された。

### [草本]

オヒシバ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ属、スゲ属、イボクサ、イグサ科、タデ属、ギシギシ属、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科、カタバミ属、アリノトアグサ、チドメグサ属、シソ属、ナス科、キク科

### 2) 種実群集の特徴

土坑1ではヒユ属、カタバミ属、シソ属が多く、試料3ではギシギシ属が多く特徴的である。

土坑9は、種実の検出量が少ない。ヒユ属、カタバミ属、シソ属、オヒシバ、カヤツリグサ属、タデ属などが出現する。

## 6. 考察

### (1) 便所遺構の可能性

土坑1および土坑9は、低密度の寄生虫卵が検出された。食物残渣は検出されなかった。花粉群集は、イネ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、オオバコ属、チドメグサ亜科の出現率が高く、いずれも集落域などに生息する人里植物ばかりである。種実群集はヒユ属、カタバミ属、シソ属、ギシギシ属が多く、いずれも集落域などに生息する人里植物である。以上からみて、土坑1および土坑9の堆積物に汚染的に寄生虫卵が低密度に含まれているものの、花粉群集および種実群集は周囲に

生息していた人里植物により構成されている。このことから土坑1および土坑9の堆積物が糞便の堆積とはみなされない。土坑1と土坑9が便所遺構として使用されていた蓋然性は極めて低い。

## (2) 周囲の植生

花粉と種実で生産性、移動性、保存性の違いがあるため、出現する分類群にやや異なりがあるが、周囲はイネ科、アカザ科—ヒユ科、ヒユ属、カタバミ属、ヨモギ属、オオバコ属、アブラナ科、チドメグサ属などの人里植物が分布していたとみなされる。土坑1の試料3では、ギシギシ属果実が極めて多く、遺構内に群落を形成して生息していた可能性がある。なお、周囲は樹木が極めて少なかった。地域的な森林植生は、マツ属複雜管束亞属、スギを主要構成要素としていたと考えられる。

## 7. 摘要

- 1) 土坑1、土坑9の寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定分析を行った。
- 2) 各試料から低密度の寄生虫卵が検出された。
- 3) 花粉群集はイネ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、オオバコ属、チドメグサ亜科の出現率が高く、集落域などに生息する人里植物が多い。
- 4) 種実群集はヒユ属、カタバミ属、シソ属、ギシギシ属が多く、集落域などに生息する人里植物が多い。
- 5) 土坑1、土坑9の堆積物には汚染程度の寄生虫卵は含まれているが、便所遺構として使用されていた蓋然性は極めて低い。
- 6) 周囲の植生は、樹木が少なく、イネ科、アカザ科—ヒユ科、ヒユ属、カタバミ属、ヨモギ属、オオバコ属、アブラナ科、チドメグサ属などの人里植物が分布していた。地域的な森林植生は、マツ属複雜管束亞属、スギを主要構成要素とする。

## 参考文献

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard(1992) Methods for Extraxing Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p231—245  
金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—。奈良国立文化財研究所, p.14—15.  
金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物。医動物学, 新版臨床検査講座, 8. 医薬出版社, p.9—55  
中村純（1973）花粉分析。古今書院, 82—110  
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店, p.248—262  
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究, 13, P.187—193  
中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第10号, P.21—30.

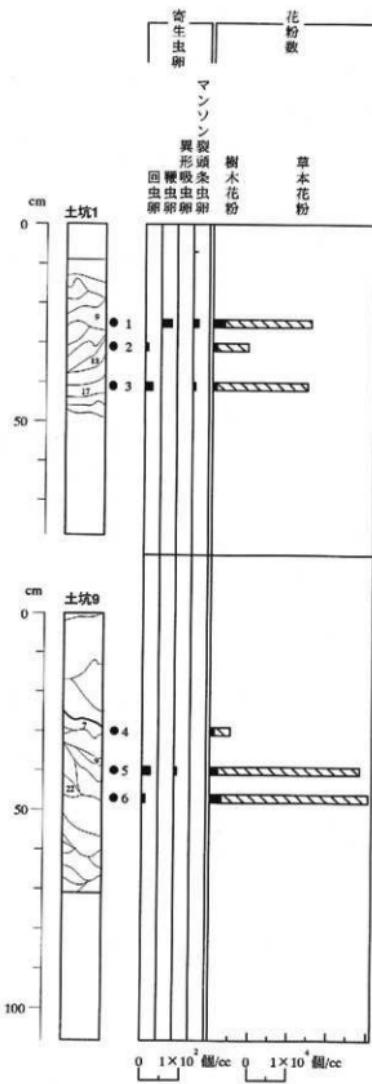


図1 蔵小路西遺跡 土坑9における寄生虫卵・花粉数

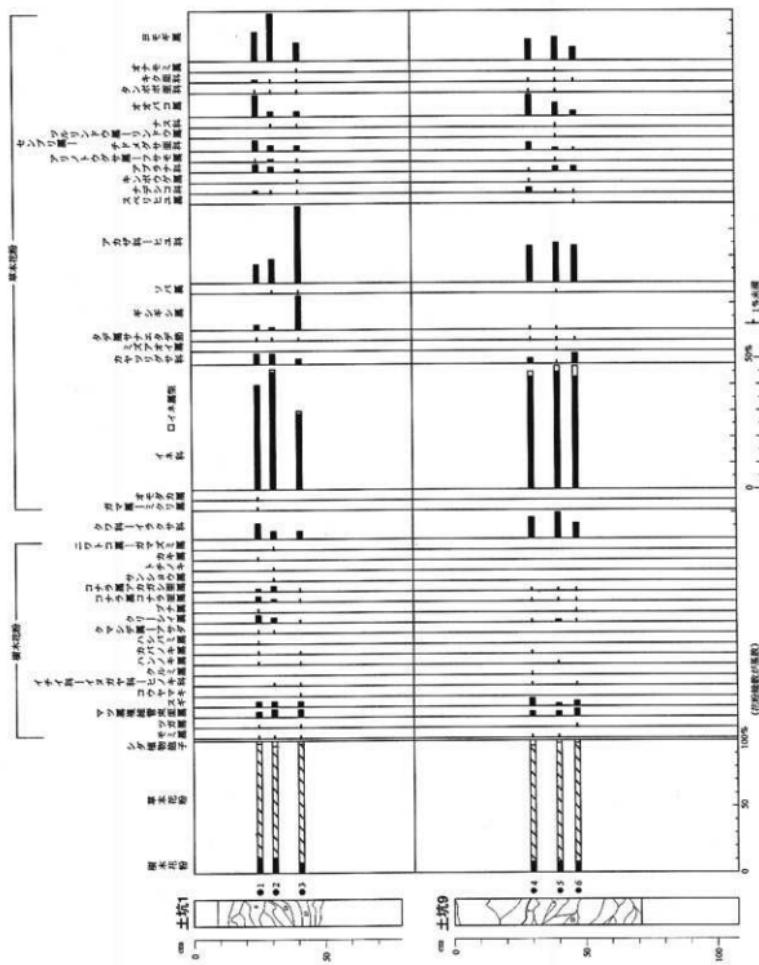


図2 蔵小路西遺跡 土坑1・土坑9における花粉ダイアグラム

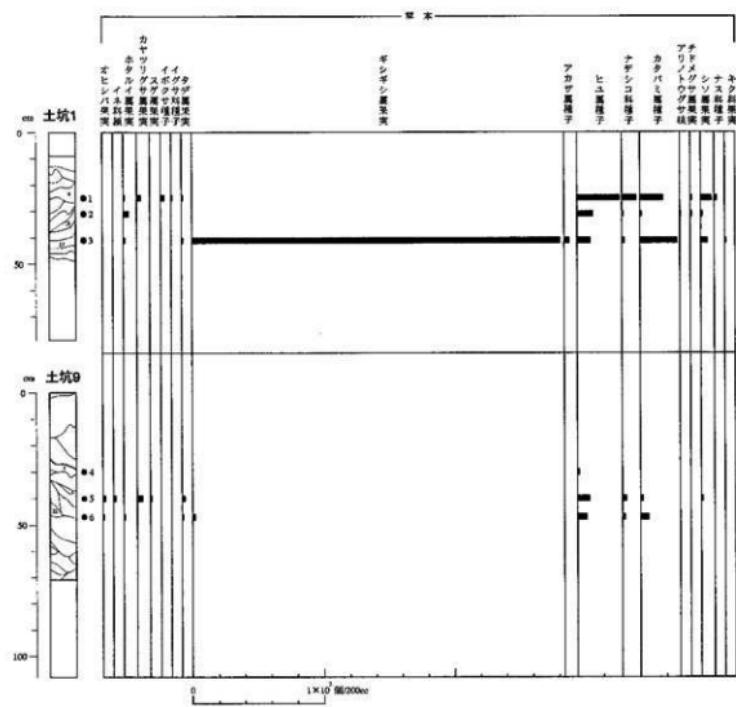


図3 蔵小路西遺跡 土坑1・土坑9における種実ダイアグラム

表2 蔵小路西遺跡における寄生虫卵分析結果

学名	分類群 和名	土坑1			土坑9		
		1	2	3	4	5	6
<i>Helminth eggs</i>	寄生虫卵						
<i>Ascaris</i>	回虫卵			1	3	3	1
<i>Trichuris</i>	鞭虫卵			2			
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>	異形吸虫卵					1	
<i>Diphyllobothrium mansoni</i>	マンソン裂頭条虫卵	1		1			
	試料1cc中の寄生虫卵数 $\times 10$	3.9	0.6	2.4	0.0	2.8	0.7
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

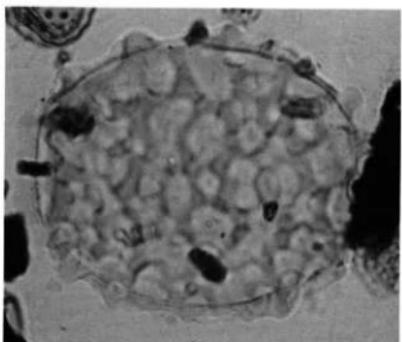
表3 蔡小路西遺跡における花粉分析結果

学名	分類群 和名	土坑1			土坑9		
		1	2	3	4	5	6
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Abies</i>	モミ属	1	1	1	2	1	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1		1			1
<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	マツ属複雜管束亞属	9	11	13	9	8	12
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	8	9	9	11	4	7
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ			1			
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		2	1	3		1
<i>Juglans</i>	クルミ属				1		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1		1			1
<i>Betula</i>	カバノキ属	2		1	2		
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1					
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシテ属-アサダ	1	1				
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリーシイ属	12	8	4	4	4	3
<i>Fagus</i>	ブナ属	1					1
<i>Quercus subgen. Lapidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	11	5	3	2	1	3
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	7	6	3	4	3	2
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属		1				
<i>Aesculus turbinata</i>	チノキ	1					
<i>Diospyros</i>	カキ属	2					
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニコトコ属-ガマズミ属			1			
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木·草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	28	11	14	35	35	21
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属-ミクリ属	1					
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1					
<i>Gramineae</i>	イネ科	196	172	145	192	152	192
<i>Oryza type</i>	イネ属型	2	2	3	9	7	14
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	19	15	12	7	2	14
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属						1
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	1	2	1	3	2
<i>Rumex</i>	ギンギシ属	10	5	67	1	3	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1	1		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	32	34	148	63	49	52
<i>Portulaca oleracea</i>	スペリヒユ属						1
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	5	1	4	8	1	1
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			1	4		
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科	15	6	5	4	5	6
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウガサ属-フサモ属	2	4	1		1	
<i>Hydrocotylidae</i>	チドメグサ亜科	17	7	9	11	4	1
<i>Swertia-Tripterostpermum-Gentiana</i>	セツリ属-トリペルドウ属-リンゴ属						1
Solanaceae	ナス科		1	1		1	
<i>Plantago</i>	オオバコ属	40	8	11	35	16	6
Lactucoideae	タンボが豆科	4	1	2	2	1	
Astroideae	キク亜科	7	1	1	3	3	3
<i>Xanthium</i>	オナモミ属			1		1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	51	68	37	35	29	17
Fern spore	シダ植物胞子						
Monocolate type spore	単孢胞子	4	2	6	4		2
Trilate type spore	三条孢胞子	9	10	11	13	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉	57	46	38	38	22	30
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木·草本花粉	28	11	14	35	35	21
Nonarboreal pollen	草本花粉	403	327	451	375	281	309
Total pollen	花粉总数	488	384	503	448	338	360
	試料1cc中の花粉数 ×10 <sup>4</sup>	2.5	9.2	2.4	5.4	3.8	4.0
Unknown pollen	未定花粉	2	4	3	4	4	1
Fern spore	シダ植物胞子	13	12	17	17	3	6

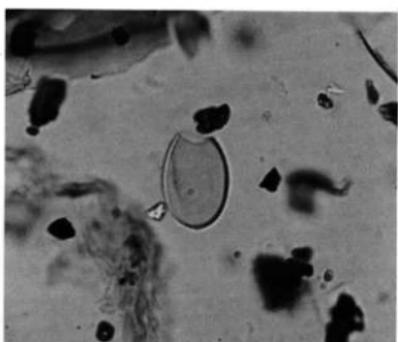
表4 蔽小路西遺跡種実同定結果

学名	分類群	和名	部位	(試料200cc中)		SK12		SK39	
				1	2	3	4	5	6
Herb	草本								
<i>Eleusine indica Gaertn.</i>	オヒシバ	果実					2	1	
Gramineae	イネ科	穎					2		
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	1	4	1				1
<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ属	果実	3				4		
<i>Carex</i>	スゲ属	果実					1		
<i>Aneilema keisak Hassk.</i>	イボクサ	種子	3						
Juncaceae	イグサ科	種子	1						
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1		1		2	1	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	果実			281			2	
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子			4				
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	32	12	10	1	9	7	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	11	1	2		3	2	
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	17	4	28		2	6	
<i>Haloragis micrantha R. Br.</i>	アリノトウグサ	核		1					
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	1	1					
<i>Perilla</i>	シソ属	果実	8	1	5			1	
Solanaceae	ナス科	種子	2						
Compositae	キク科	果実			1				
Total	合計		80	24	333	1	26	20	
Unknown	不明				1	1		1	

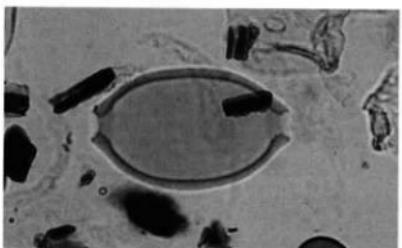




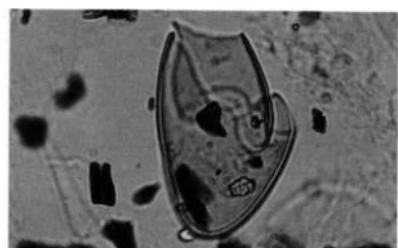
1 回虫卵



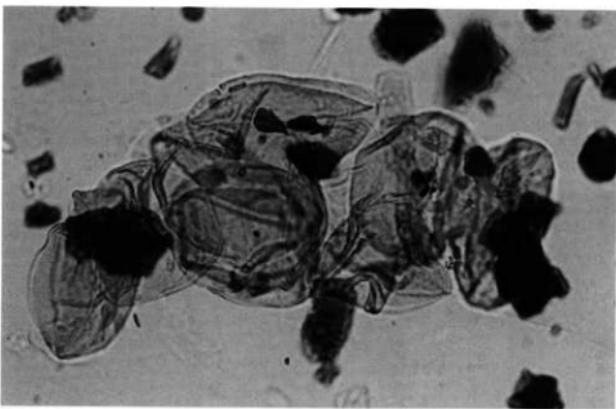
2 異形吸虫卵



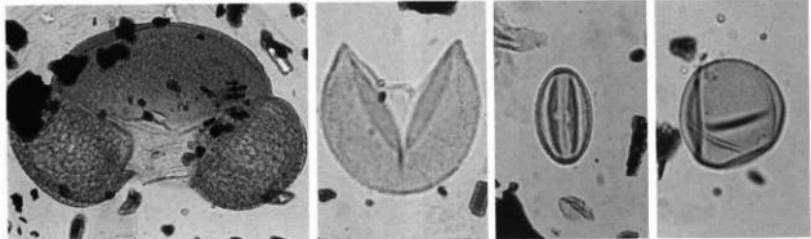
3 肉虫卵



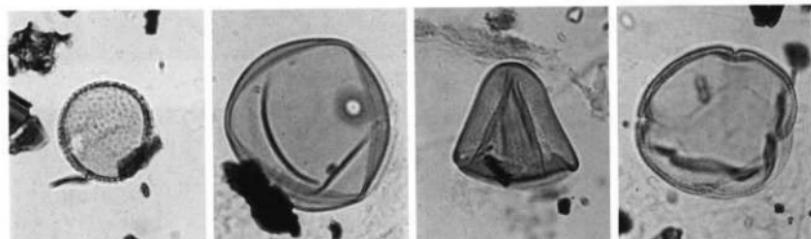
4 マンソン裂頭条虫卵



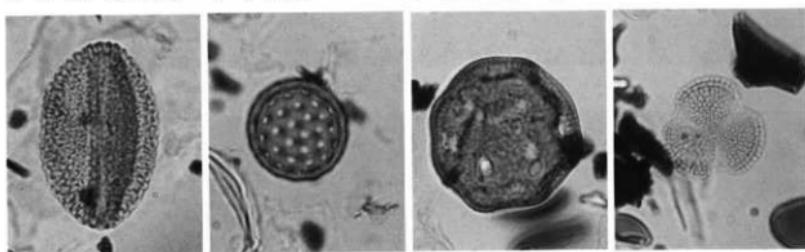
5 イネ科の集塊



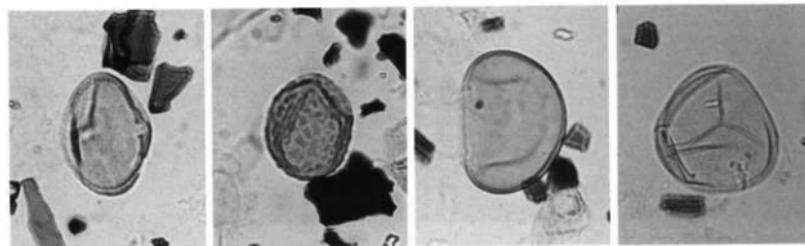
1 モミ属 2 スギ 3 クリーシイ属 4 クワ科ーイラクサ科



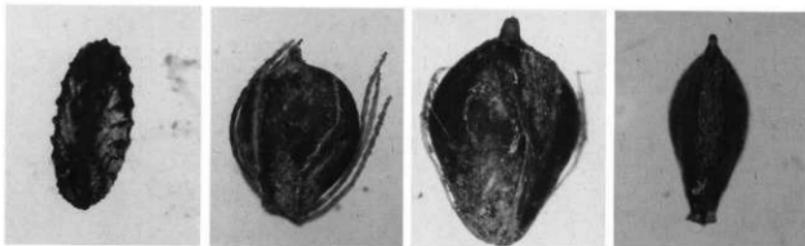
5 ガマ属ーミクリ属 6 イネ属型 7 カヤツリグサ科 8 ギシギシ属



9 ソバ属 10 アカザ科ーヒュウ科 11 ナデシコ科 12 アブラナ科



13 チドメグサ亜科 14 オオバコ属 15 シダ植物单条溝孢子 16 シダ植物三条溝孢子



1 オヒシバ果実

2 ホタルイ属果実

3 同左

4 カヤツリグサ属果実

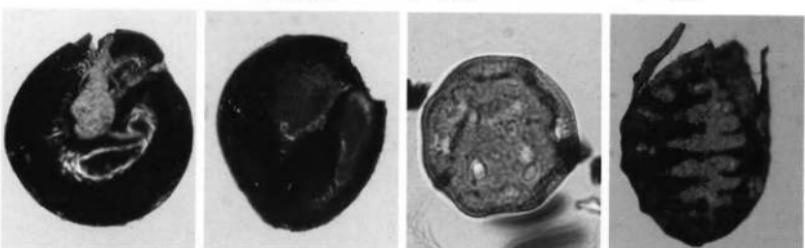


5 カヤツリグサ属果実

6 ギシギシ属果実

7 同左

8 同左

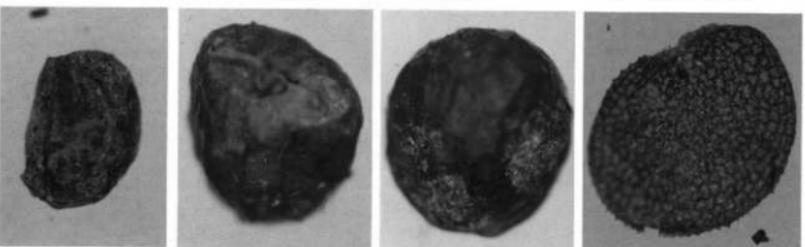


9 アカザ属種子

10 ヒュ属種子

11 同左

12 カタバミ属種子



13 チドメグサ属果実

14 シソ属果実

15 同左

16 ナス科種子



# 蔵小路西遺跡における花粉・珪藻分析

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

## はじめに

当報告は、島根県教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した分析委託業務報告書の概報である。

蔵小路西遺跡は島根県東部の出雲平野中心部に位置し、「出雲バイパス」建設工事に先立って発掘調査が行われた。本報では発掘調査に伴って露出した掘削壁面より採取された試料を対象に花粉および珪藻分析を実施し、周辺地域での古植生および堆積環境の推定を行った。隣接する姫原西遺跡の調査が同時期に島根県教育委員会により実施され、花粉・珪藻分析が行われており（川崎地質株式会社、1999）、この結果も踏まえて考察を行った。

## 試料について

図1に示す各地点で島根県教育委員会により採集された試料を分析した。各地点の模式柱状図と試料採取層準を図2～8の花粉ダイアグラム中に示す。花粉分析では、これらの試料の全てを対象とした。また珪藻分析ではF、D区の試料を対象とした。

## 分析方法および分析結果

### (1) 分析方法

花粉・珪藻処理は、渡辺（1995a, b）にしたがった。観察・同定は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。また、珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が200個体以上になるまで同定を行った。しかし、一部の試料では花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を越えることができなかつた。

### (2) 分析結果

花粉分析結果を図2～8の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図9～16の珪藻ダイアグラムおよび珪藻総合ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基数にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で表したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で表したものである。

## 考察

### (1) 花粉分帶

花粉分析結果、および出土遺物より推定される堆積年代をもとに花粉分帶を行った。各地点での

花粉帯と試料番号との対応は図2～8の花粉ダイアグラムを参照されたい。

① III帯

スギ属、アカガシ亜属が卓越する。

② II帯

マツ属（複雑管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属が卓越する。

藏小路西遺跡A大溝34の推定堆積年代はII帯とした他地点の堆積年代と一致する。しかし花粉組成では、スギ属が卓越しマツ属（複雑管束亜属）、アカガシ亜属を伴うなど、他の地点と異なる。このことから、藏小路西遺跡A大溝34をII帯とした。

③ I帯

マツ属（複雑管束亜属）が卓越する。

(2) 珪藻化石群集の設定

珪藻分析結果をもとに、調査区毎に珪藻化石群集を設定した。

D区

①KDD-1 (19、20、22、23)

淡水種がほとんどを占める。底生種の *Cymbella* 属、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属の諸種が高率を示す。

②KDD-2 (21)

淡水種がほとんどを占める。底生種の *Eunotia pectinalis var. undulata* が卓越するほか、底生種の *Cymbella* 属、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属の諸種が高率を示す。

③KDD-3 (24、25)

淡水種がほとんどを占める。浮遊種の *Melosira varians* が卓越し、底生種の *Cymbella* 属、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属の諸種を伴う。

F区

①KFD-1 (1～4、6、14～16)

淡水種がほとんどを占める。底生種の *Cymbella* 属、*Pinnularia* 属の諸種が高率を示す。

②KFD-2 (13)

淡水種がほとんどを占める。浮遊種の *Melosira varians* が卓越する。

各花粉帯と堆積年代について

①姫原西遺跡との比較

同時期に実施された姫原西遺跡（川崎地質株式会社,1999）と今回の分析結果との関係は表1のようにまとめられる。したがってI帯は中世以降、II帯は中世頃、III帯は弥生～古墳時代頃の植生を表すと考えられる。

②周辺地域との比較

出雲平野内では従来、花粉分析がほとんど行われていなかったが、近年遺跡の発掘調査に伴い花粉分析が行われるようになってきた。今回の調査地の北に隣接する小山遺跡では花粉・珪藻分析が行われ、渡辺・遠藤（1998）により報告されている。今回の花粉帯と渡辺・遠藤（1998）の花粉帯

を比較すると、表2のようになる。また、今回の花粉帯と中海湖底および周辺地域、宍道湖湖底および東岸地域で設定された花粉帯（大西、1993）との比較結果も表2に示す。

今回のⅢ帶はスギ属、アカガシ亜属の卓越で特徴付けられることから、小山遺跡のP-Ⅲ帶、中海・宍道湖のスギ亜帯に相当する可能性がある。

今回のⅡ帶はマツ属（複維管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属の卓越で特徴付けられることから、小山遺跡のP-Ⅱ帶あるいはI帶、中海・宍道湖のスギ亜帯あるいはカシ・ナラ亜帯に相当する可能性がある。

今回のI帶はマツ属（複維管束亜属）の卓越で特徴付けられることから、小山遺跡では対応する花粉帯がない。また中海・宍道湖のマツ亜帯に相当する可能性がある。

表1 姫原西遺跡との比較

姫原西遺跡		蔵小路西遺跡																
		SD01		A		A大溝		C		D		F1-1		F1-2		F2		
花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	
II														I 中量				
III																		
弥後	III	弥終	III	弥後										III	古初		III	弥末

表2 周辺地域との対比

本調査		小山遺跡		中海・宍道湖	
花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代
I	中世～			マツ亜帯	AD1500～
II	中世	P-I or II		カシ・ナラ亜帯 or スギ亜帯	AD 700～ ～AD700
III	～古墳	P-III		スギ亜帯	BC 450～

#### 古環境の推定

ここでは、花粉帯毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

##### (1) Ⅲ帯期（弥生時代～古墳時代頃）

出雲平野を望む中国山地縁辺部、および北山山地にはカシ類を要素とする照葉樹林で広く覆われていたと考えられる。また、谷沿いにはスギやトチノキが溪谷林として分布していたと考えられる。スギ属花粉が多産することから平野部の湿地にもスギが生育していた可能性が指摘できるが、スギの生態に不明な点が多いことから断定はできない。

A区の河川？内（弥生時代後期に埋積）は、ヒシ属花粉が検出されることから淡水の沼沢湿地環境であったと考えられる。

D区のうち下部の26～23は河川？内（古墳時代初頭に埋積）で堆積したことが、図面上から明らかである。これらの層準ではA区同様にヒシ属花粉が検出されることから淡水の沼沢湿地環境であったと考えられる。さらにこれらの中の下部（25、24）では *Melosira* 属が高率になる（KDD-3）ことから水深がやや深く、上部（23、21）では浅くなつたと推定される。また上部の22～20の層準は発掘地点全域に認められること、ヒシ属が検出できないことから下部の26～23と堆積環境が異なると考えられる。またイネ科（40ミクロン以上）が高率になることから、この場所で水田耕作が行われていた可能性がある。ただし、21層準ではガマ属、カヤツリグサ科花粉が高率を示すことから水田であった可能性は低い。

F区2の河川？内（弥生時代末以降に埋積）は、ヒシ属花粉が検出されることから淡水の沼沢湿地環境であったと考えられる。珪藻分析結果では中部の13で *Melosira* 属が高率になるなど、水深の変化があったことがわかる。

### （2）II带期（中世頃？）

おそらく人間による干渉により、中国山地縁辺部や北山山地の照葉樹林はアカマツの卓越する二次林へ徐々に変わっていったと考えられる。

A区の各試料（33～30）の採取層準（中世に堆積）は連続性が悪く広がりが狭いことから、この地点が水田であった可能性は低い。しかしイネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が不安定であるがやや高い試料もあることから、近くに水田が広がっていた可能性はある。

A区大溝（中世に埋積）から得られる花粉組成は、出現する種類が少ないと、スギ属の高率出現で特徴付けられる。このような特徴から姫原西遺跡のSD01と同様に、溝の肩からの二次堆積の可能性が指摘できる。花粉組成をそのまま捉えると、湿地性植物の花粉が少ないと、アシなどは溝の中にわずかに生育する程度であり開かれた水面が多く、周辺は比較的乾燥しタンボボが咲くような草原であったと考えられる。

C区の中世耕作土と考えられていた27層準からは、裏付けるようにイネ科（40ミクロン以上）が高率で出現した。今後、プラント・オバール分析の実施により水田跡と確定できる。また下位の28層準からもイネ科（40ミクロン以上）が高率で検出される。一方28層準ではアカザ科-ヒユ科も高率で出現する。ほぼ同層準に用途不明のビットが多数検出され、アカザ属、ヒユ属の種子やアカザ科-ヒユ科の花粉が多数検出される（金原・金原、1999）。またこの層準が地層として連続しないことから、28層準が人為的なビットであった可能性が示唆される。

D区ではイネ科（40ミクロン以上）が高率を示すことから、周辺には水田が広がっていたと考えられる。

### （3）I带期（中世）

二次林化はさらに進み、アカマツ林が中国山地縁辺部や北山山地で広く分布するようになったと考えられる。

F区1-1の河道（中世）およびF区1-2の珪藻化石群種は共にKFD-1とされ、淡水沼沢湿地で堆積したと考えられる。また、F区1-1の河道では上部ほど浮遊種の割合が少なく、徐々に埋まつていった様子が伺える。花粉分析では両地点共にイネ科（40ミクロン以上）が高率で検出

され、F区1-1の河道周辺およびF1区-2周辺で稻作が行われていたと推定できる。さらに、F区1-1ではソバ属も検出され、休耕田や畦で蕎麦栽培が行われていたと考えられる。

### まとめ

藏小路西遺跡において実施した花粉・珪藻分析結果から以下のことを考察した。

(1) 地域花粉帯のI～Ⅲ帯を設定した。また、A区大溝の花粉組成は、他地点のII帯と花粉組成が異なるが推定堆積年代が同じである。このことから同時期の異なる植生・あるいは二次堆積により見かけ異なる結果を示したと考え<sup>1)</sup>帯とした。

(2) 各調査区毎に珪藻化石群集を設定した。

(3) 弥生時代以降中世頃までの、出雲平野および周辺地域の古環境変遷を推定した。これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。

① 花粉分析結果から出雲平野（調査地周辺）で稻作が行われた可能性が高いと言えるのは古墳時代以降である。しかし、弥生時代の稻作を否定するものではない。近隣の姫原西遺跡では弥生時代後期の貝塚から炭化米が発見されているように、今後地点を変えての花粉分析や、プラント・オーバル分析による精査により水田の広がりが明らかになろう。

② 多くの地点では稻作に伴って蕎麦栽培が行われていた。

③ 調査地点内で何處か見つかった弥生時代後期の河川では、水位がさほど高くなくヒシが繁茂していた。

④ 弥生時代後期以降の堆積物はいずれも淡水環境で堆積したと考えられ、この時期にはすでに神門水海が淡水化していた可能性が高い。

### 引用文献

- 金原正明・金原正子（1999）藏小路西遺跡の植生環境及び便所遺構総合分析、藏小路西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2, 261-273  
川崎地質株式会社（1999）姫原西遺跡の花粉・珪藻分析、姫原西遺跡 一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2, 191-203  
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.  
大西郁夫・千場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖湖底下完新統の花粉群。島根大学地質学研究報告, 9, 117-127.  
大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化。地質学論集, 39, 33-39.  
渡辺正巳（1995a）花粉分析法、考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社  
渡辺正巳（1995b）珪藻分析法、考古資料分析法, 86, 87. ニュー・サイエンス社  
渡辺正巳・遠藤正樹（1998）出雲平野中央部小山遺跡における地質層序と古環境、LAGUNA（汽水域研究）, 5, 215-223.

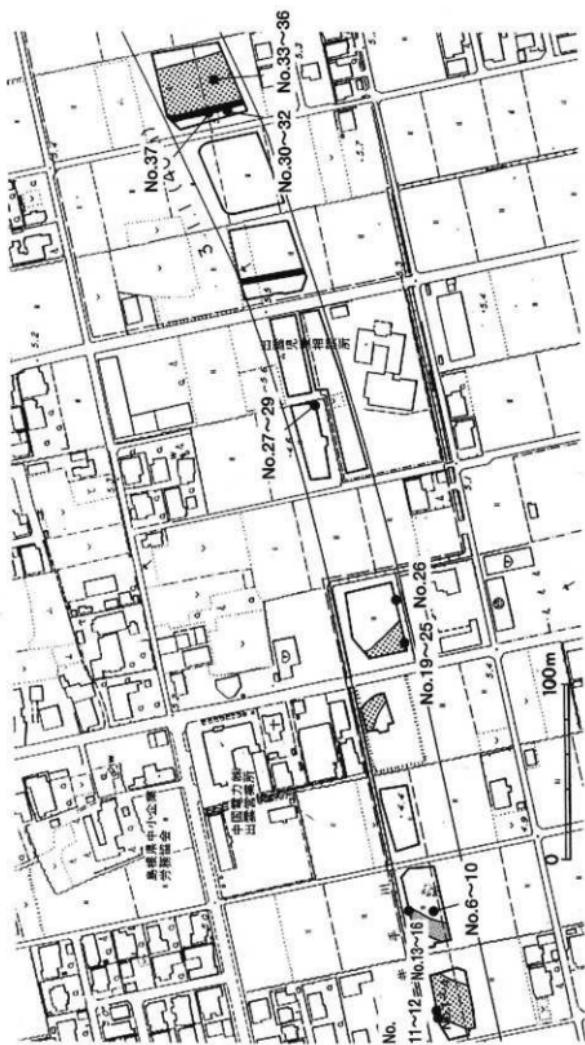
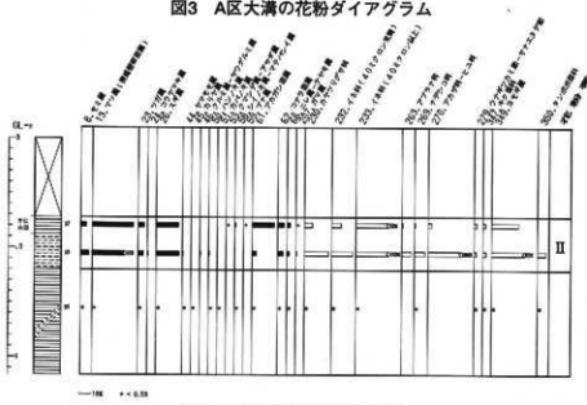
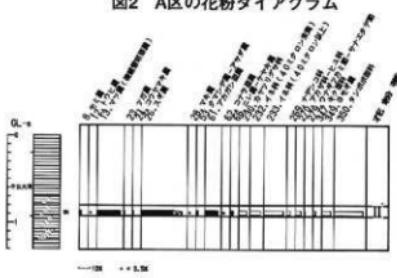
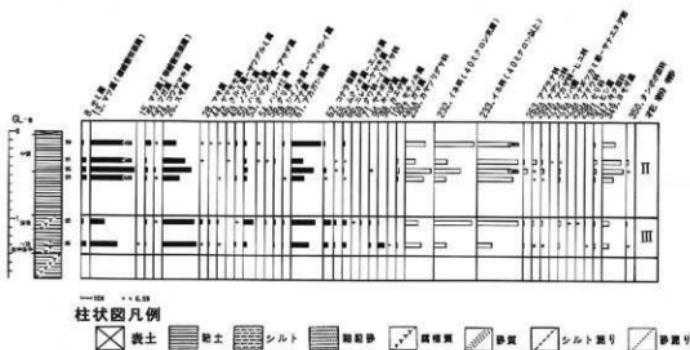


図1 試料採取地点



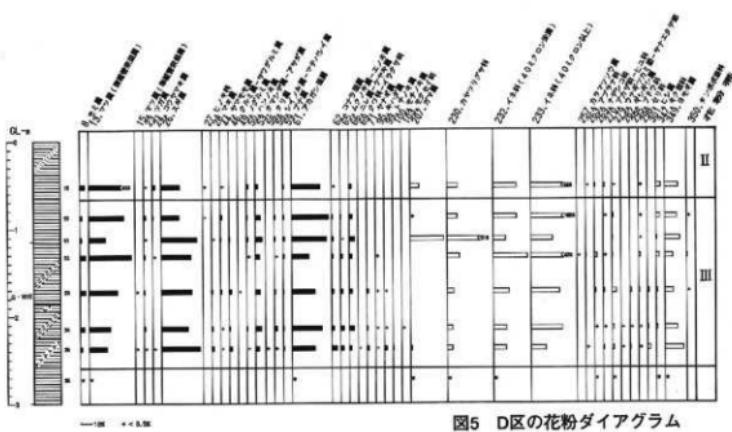


図5 D区の花粉ダイアグラム

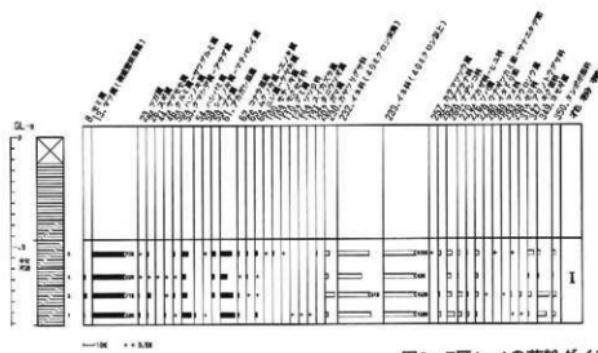


図6 F区1-1の花粉ダイアグラム

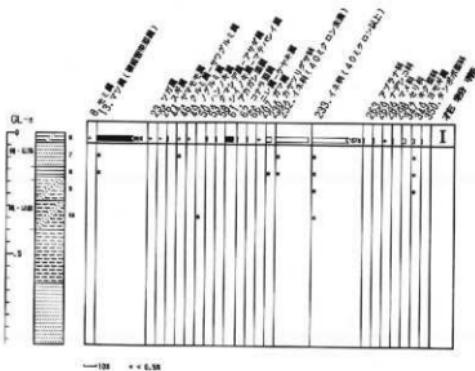


図7 F区1-2の花粉ダイアグラム

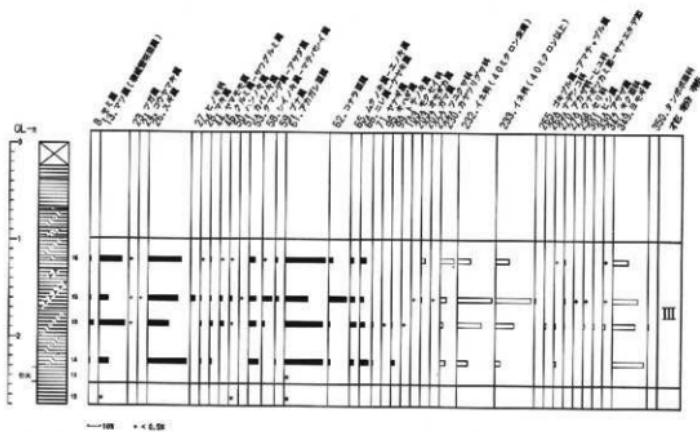
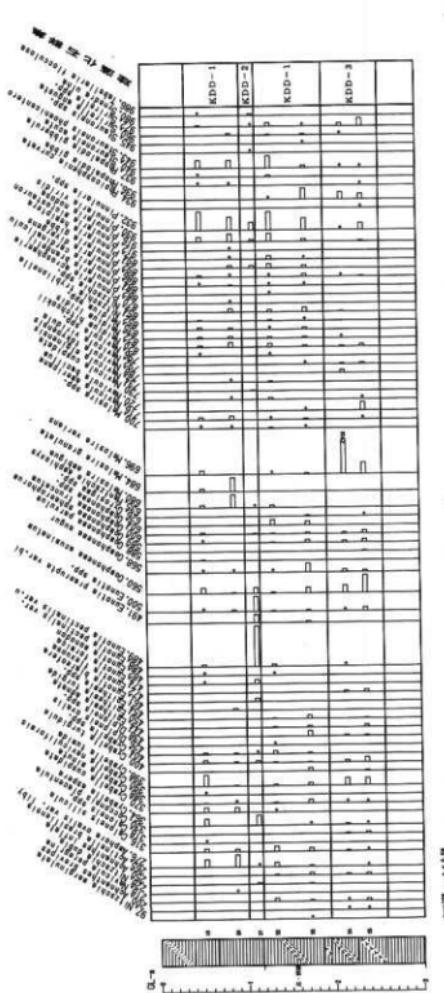


図8 F区2の花粉ダイアグラム

図9 D区挂藻ダイアグラム



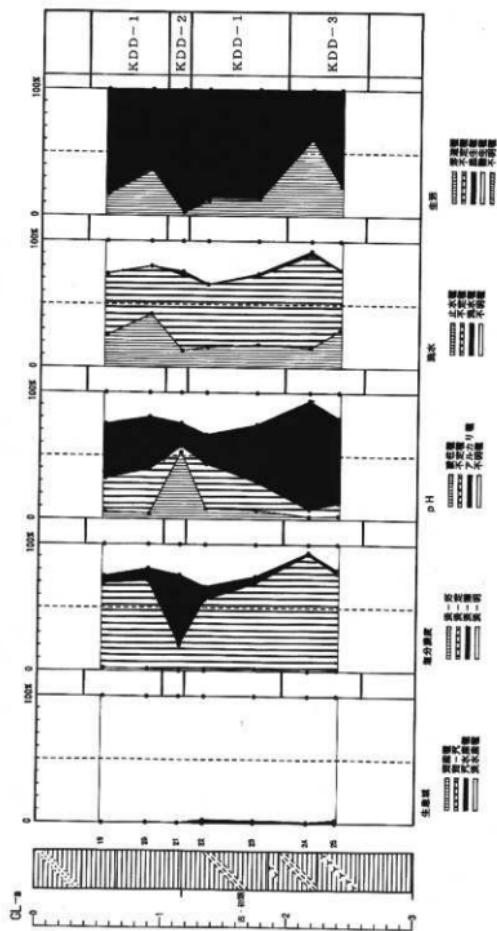


図10 D区の埋蔵組合ダイアグラム

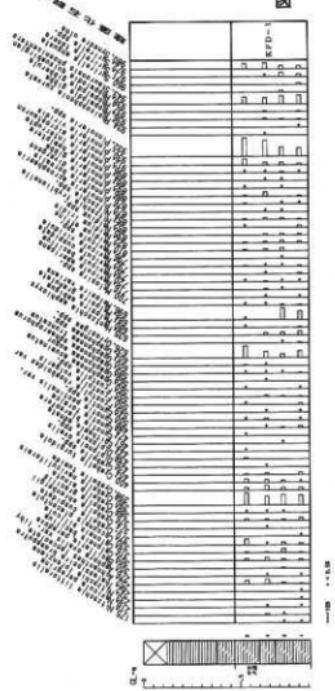


図11 FDX-1-1の注湯ダイアグラム

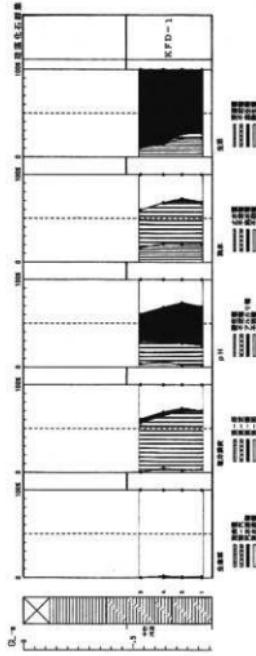


図12 FDX-1-1の注湯総合ダイアグラム



図13 F区1-2の柱状総合ダイアグラム

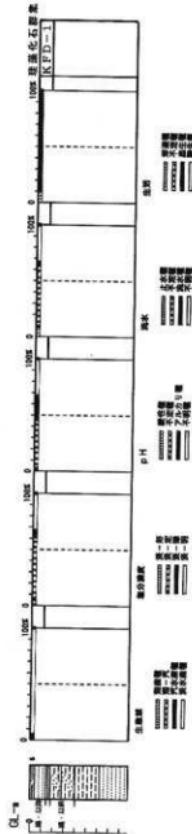


図14 F区1-2の柱状総合ダイアグラム

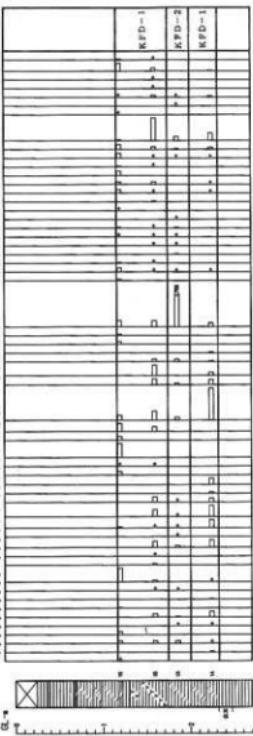


図15 F区2の結果結合ダイアグラム

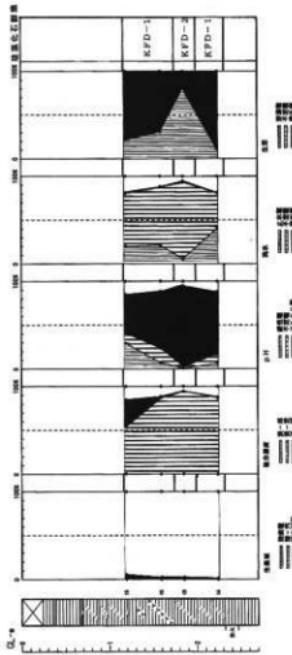


図16 F区2の結果結合ダイアグラム

## 5. まとめ

本遺跡からは①縄文時代晩期末（弥生早期）の遺構と遺物②弥生時代後期初頭から古墳時代初頭の自然河道と微高地の居住域の一部③12世紀後半から15世紀前半の中世の方形居館が検出された。

以下、①～③の順に遺跡の様相を概観し、まとめとしたい。

### 第1節 四絆遺跡群と藏小路西遺跡

1. 四絆遺跡群とは 第2章でも触れたように、本遺跡は矢野遺跡を中心とし小山遺跡、大塚遺跡、白枝荒神遺跡より構成される四絆遺跡群の一角を構成するものである。今回の出雲バイパス建設予定地内の調査において姫原西遺跡、藏小路西遺跡、渡橋沖遺跡が発見されたことにより、その範囲は拡がり東西約2.5km、南北約2.0kmにも及ぶものとなった。今回の調査成果を加えて作成した図224のように、四絆遺跡群は斐伊川・神戸川の三角州から構成される沖積平野である出雲平野の中央部にあり、各遺跡が小規模な河道により分断された微高地上に立地している。遺跡群の核をなすのは矢野遺跡であり、その周縁の遺跡は相互に強い結びつきをもって展開していくようである。本遺跡群については矢野遺跡、小山遺跡などで部分的な調査がなされたのみだが、断片的な情報からでも、出雲平野の他の集落遺跡群から傑出した規模と内容を誇るものであることが窺い知れる。今回の藏小路西遺跡の調査成果を四絆遺跡群の中で考えて見たい。<sup>(1)</sup>

2. 縄文時代から弥生時代 出雲平野の骨格が出来上がり、人々が本格的に平野に進出し始めたのは縄文時代後期から晩期にかけてのことである。<sup>(2)</sup> 矢野遺跡、<sup>(3)</sup> 善行寺遺跡<sup>(4)</sup>（図5の12）で当

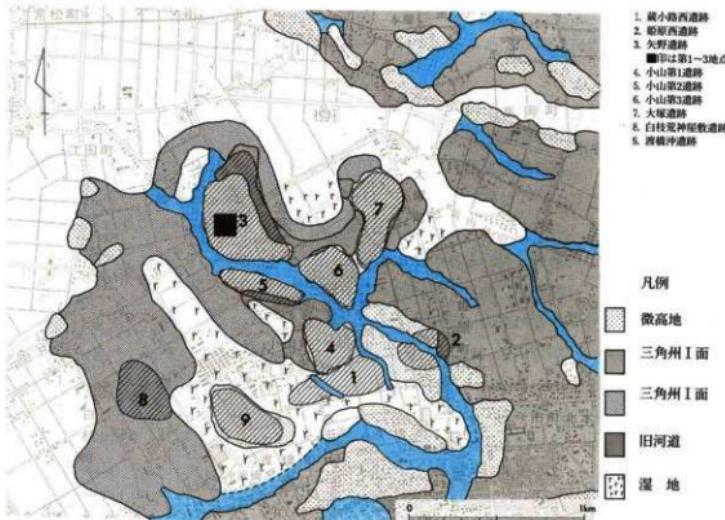


図224 四絆遺跡群と藏小路西遺跡の位置関係 (S=1/25,000)  
田中義昭1996を改変

該期の遺物が確認されていたが、本遺跡で初めて晩期最終末（弥生早期）の突堤文土器を伴う遺構の存在が確認された。限定された面積での調査であり、遺跡の全容を把握していないのかもしれないが、小規模な火除群と土器溜りから、いわゆるキャンプ地的性格をもつものと推察される。また本遺跡のCS-2区や姫原西遺跡でも突堤文土器が出土していることから、周辺の微高地上にも人々が積極的に進出していたことが窺えよう。しかし、微高地上の総てで集落が継続して営まれていったわけではないようである。今後、遺跡「群」形成期の資料が増加していくことが期待される。

3. 弥生時代から古墳時代 本遺跡では弥生時代後期初頭段階までに形成され、弥生時代終末から古墳時代初頭に埋没した自然河道を検出した。一条の蛇行する河道を、4か所で切り取るように調査したわけだが、東から西へ流れ当時の神門水海に注いでいたことが推察された。河道には井堰、しがらみ状遺構なども発見されており、当時の人々が農業用水等に利するために河道を積極的に管理した姿を示している。<sup>(1)</sup> 河道からは弥生時代前期後半から後期末までの遺物が出土している。当該期の居住域が付近の微高地上に存在していたものと考えられるが、遺構としては草田5~6期にまで下るものしか検出できていない。四絡遺跡群のなかで弥生時代前期前半の遺物が出土しているのは、遺跡群の拠点集落として位置付けられている矢野遺跡第1・3地点のみである。従来は、この矢野第1・第3地点から集落が拡散し、中期以降になって小山、大塚遺跡などの集落が形成されたものと考えられてきた。集落拡散のプロセスは今後、各遺跡の様相がより具体的になっていくなかでの課題といえよう。

## 第2節 中世の館跡について

### 1. 遺物の編年試案

館跡の存続期間と遺構の変遷を考える上で時間軸の設定がまず必要となる。これについては、つきのような方法で行った。

①土坑一括資料を中心とし、土器溜り、大溝出土のものは補完的なものとして取り扱う。

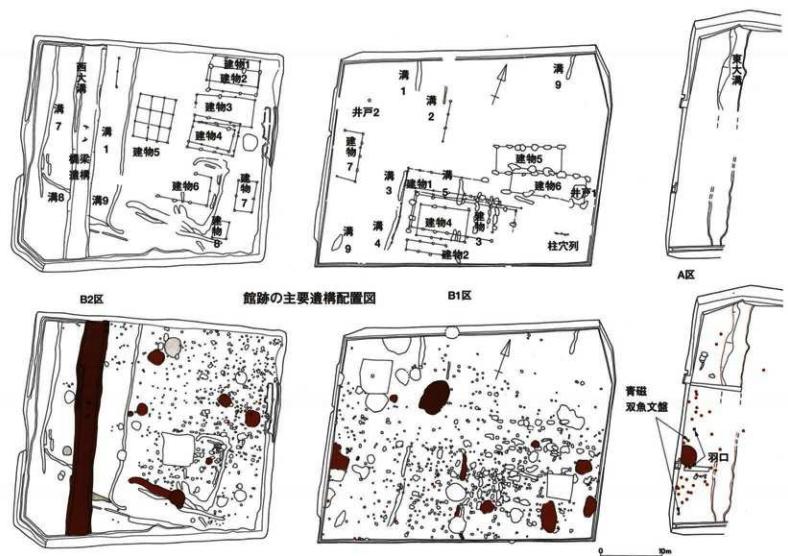
②土師器、特に壺、皿の形態変化を重視し、共伴する陶磁器類で年代的位置付けを行う。

この作業により1~5期の段階を設定した。<sup>(2)</sup> 形態分類等については紙幅の都合もあり詳細には記述し得ない。これについては稿をあらためて行いたい。1~4期までが館の存続期間、5期が館廃絶後に相当する。このうち4期については良好な一括資料もなく、時期設定には無理があるかもしれないが、5期との空白を埋めるものとしてあえて設定している。以下、概要を記す。

**1期** B2区の土坑1（図125）、井戸1（図86）を指標とする。皿、壺とも二つのタイプがある。壺 赤茶色で器壁が薄い作りのもの（図86の1・3、図125の20・21）と肌色から灰色の器壁の厚いものが（図125の20）見られる。前者は、体部が逆ハ字に大きく開き、内外面にロクロ成型痕を残している。全形の知るのは図125の20で、法量は口径12.2cm、器高3.7cm、底径5.3cm。後者は図125の22~25で全形は不明である。

皿 赤茶色で器壁が薄い作りのもの（図125の1~6）と肌色で器壁の厚いもの（同7~10）が、見られる。前者は体部が逆ハ字に大きく開き、内外面にロクロ成型痕を残している。口径6.4~7.1cm、器高1.2~1.9cm、底径4.7~5.1cm。後者は体部の内外面を回転ナデで仕上げ、立ち上がりは強い。

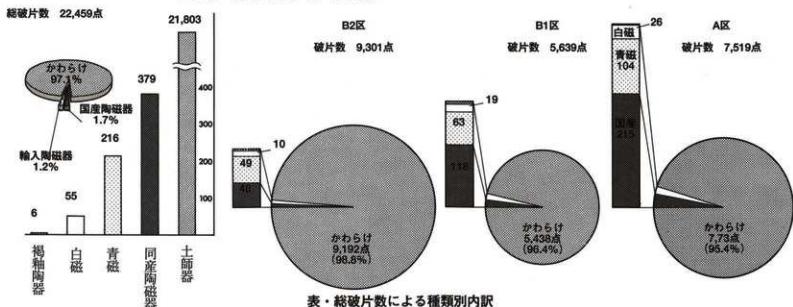
**2期** B1区の土坑1（図61）、土坑22（図83）を指標とする。いずれも回転ナデで仕上げロクロ成型痕を消している。壺、皿ともヴァラエティーが見られる他、新たな器種として鉢が加わる。



館跡全体図

凡例  
 ● 黒トーンは銅冶陶器遺物が出土した遺構  
 ● 黒のドットは銅冶陶器遺物出土地  
 ● 茶色のマスは輸入陶磁器が出土した遺構  
 ● 茶色のドットは輸入陶磁器出土地点

図225 館跡全体図 (S=1/600.)



**坏** 体部が円みをもって立ち上がるもので、内外面とも回転ナデによって丁寧に仕上げている。体部は逆ハ字に聞くタイプ（図61の1～3）と円みをもって、やや内傾気味に立ち上がるものが見られる。細かく見れば口縁端部の処理にも差異があるようである（70頁参照）。法量にも3段階ある。口径11.8～12.2cm、器高3.8～4.1cm、底径3.8～4.4cmの小形のもの。口径12.0～13.0cm、器高4.0cmの中形品。口径11.7～12.0cm、器高4.5～5.1cm、底径4.8～5.2cmの大形品である。

また当該期には色調が白色を呈する精緻なタイプも見られる（図57の8他）。

**皿** 体部が外方に逆ハ字に立ち上がり、底部外縁から体部の立ち上がりを強くナデ、段を付けるものの（図61の1～4）と、体部の立ち上がりが強く内傾気味になり、底部と体部の境に段が付かないもの（同5・9）がある。他にも猪口のようなタイプ（図61の10）や口径8.2cmの大形品（同11）見られる。法量は口径7.4～8.0cm、器高1.6～1.9cm、底径4.0～5.1cm。

台付き皿 皿部のわかる資料はない。脚端部は、溝状に凹むもの、円く仕上げるもの、鉄状に突出するものなど多様である。底径は6.1～7.1cmのものまで見られる。

**3期** B 2 区土坑9を指標とする。グレイがかった色調で器壁が厚いものが見られる。

**坏** 器壁が厚く底部と体部が逆台形になるもの（図135の18、20、25）と、体部の中ほどで屈曲しやや円みのある作りのもの（同19）が見られる。図125の5、図86の3も全形は窺えないが、このグループに属するかもしれない。2期で見られた円みのある体部に口縁端部をシャープに仕上げた丁寧な作りのもの（図135の19）も残るようである。

**皿** 色調が淡肌から肌色を呈し体部が逆ハ字に聞くものと（図135の1～6）、底部の器壁が厚く体部と底部の境が屈曲気味になるもの（同7、8）と白色を呈する器壁が薄いもの（同9～11）が見られる。

台付き皿 全形は窺えないが、いずれも小形のもののように、脚部は抜がらない形態のようである。

**4期** 壱はB 1 区 B 2 区包含層出土遺物図101の4～6、図122の3、皿は図101の1が該当する。

**坏** いずれも小形品で口径11.1～11.4cm、器高5.0～5.4cm、底径は3.0cmのものと4.7～5.0cmのものがある。体部は丁寧なナデにより滑らかに仕上げ、内面は体部と底部の境が凹みをもつ。図101の6が体部が口縁端部近くで外反するのに対し、それ以外のものは逆ハ字に立ち上がる。

**皿** 図101の7が該当する。体部中ほどに稜線をもち口縁端部に向けて外反して立ち上がる。内面の体部と底部の境が凹む。

**5期** 墓1（図149）・3（図152）・4（図154）資料を指標とする。3点とも壊である。

**坏** いずれもナデによって丁寧に仕上げるもので、体部は逆ハ字か、中ほどで折れて口縁端部に向けて外反気味に立ち上がる。

各段階の共伴遺物 1期は同安窯の皿、龍泉窯系青磁碗I～5類、2期は常滑系陶器、3期は龍泉窯系青磁碗II類、白磁碗IV類、青白磁合子、古瀬戸前期IV様式の卸し皿と共に共伴している。

他遺跡では、B 1 区土坑1資料は松江市の塙土墳墓<sup>(17)</sup>、B 2 区土坑1については同じ四絆遺跡群の矢野遺跡第6地点、<sup>(18)</sup> B 2 区土坑9については黒田畦遺跡<sup>(19)</sup>の資料に大まかには併行するものと考えられる。また共伴資料の無い4、5期のうち、墓1の土器は松江市下黒田遺跡SK01資料<sup>(20)</sup>から、15世紀後半に位置付けられる。

各段階の年代 年代的位置付けは共伴遺物と他の遺跡資料を参考にして、1期は12世紀後半以降、2期は13世紀前半以降、3期が13世紀後半以降として位置付けられる。5期は15世紀後半、4期は

それ以前と考えられる。以上の点から考えてこの館跡は12世紀後半～15世紀前半代を中心とする時期に機能していたものと思われる。

各期の様相については充分検討しきれていない点も多い。今後より精緻なものにしていきたい。

## 2. 遺構の変遷

前項の時期区分案をもとにして、時期のわかる遺構をまとめると次の通りである。

時期	A区	B1区	B2区
1期			土坑1・3
2期		建物5 井戸1 土坑1、3、8、22	建物1 土坑4、6
3期		土坑20	土坑9、20
4期	土坑1	土坑17、建物6	建物2

建物 建物はその棟方向から次のようにグルーピングできる。

B1区 a〔3、4、5〕 b〔1、2、6、7〕

B2区 c〔4、5、6〕 d〔7、8、1〕 e〔建物2、3〕

これは柱穴内埋土より出土した遺物と、土坑との切り合い、重複関係から見て、B1区ではaからbへ、B2区ではc・dからeへの変遷が考えられよう。

大溝 大溝がどの段階で掘削されたのかは判然としない。しかし全国的に方形居館の出現は中世後期、14世紀以降といわれる。<sup>111</sup> 本遺跡でも西大溝が中世の溝や土坑を壊していることが確認できることから、当初から大溝が築かれていたわけではないようである。大溝掘削以前については、伸長方向や建物との位置関係から、溝1、7が館を区画する機能をもっていたものかもしれない。

3. 土器の種類別組成 館跡出土の中世土器について破片数を絞てカウントし、在地の土師器：国産陶磁：貿易陶磁の比率を調査区別に比較した。

結果は土師器が全体の97%と圧倒的決定的部分を占めた。残りは国産陶器1.7%、貿易陶磁1.2%である。国産陶器は产地を明確にし得ないものもあるが、常滑・越前系陶器が約7割、残りは丹波、備前、瀬戸美濃、東播系が続く。貿易陶磁は朝鮮王朝陶磁が1点見られたが、その他は中国製で、とりわけ龍泉窯系青磁I-5・III類、白磁II類が多く見られた。こうした遺物の比率からも館跡の最盛期が13、14世紀代であったことが窺われよう。

機能別に見てみると供膳具として土師器の壺、皿と貿易陶磁（青磁碗、白磁杯）がセットで使用されたものと思われる。貯蔵具の壺、甕類は常滑系と備前が見られる。時期的には常滑から備前に移行したようである。煮炊き具には在地産の鍋、羽釜が使用された。調理具には東播系、常滑系、丹波系、越前系の鉢といった広域の流通品に加えて在地産のものまで見られるが、14世紀後半からは備前焼が主流になるようである。機能別の調査区ごとの比率は数えていないが、印象として、地区ごとで偏りが見られるという傾向はなさそうである。

## 4. 館跡の空間利用

建物、井戸等の主要な遺構の配置と調査区ごとの遺物の組成から、館内の空間利用について検討

して見たい。建物の床面積を比較すると、B 1 区に大形の建物が築かれているのがわかる。なかでも B 1 区建物 1 は抜きんでている。B 2 区では唯一、総柱建物が見られる。

次に調査区ごとの遺物の比率を見たい。貿易陶磁の比率を見てみると、A 区 > B 1 > B 2 のようになる。A 区は建物の無い空間のようであり、A 区に投棄された土器は B 1 区で使用された蓋然性が極めて高いものといえよう。いまひとつは館内での生産活動に伴う遺物の出土状況だが A、B 2 区で羽口が、A～B 2 区の全体で鉄滓が出土している。このほか B 2 区の西大溝内からは木製品製作段階で生じた余材、廃材の類が多数出土した。以上をまとめると以下のようになる。

①館の中心的な建物は B 1 区の建物 1 と考えられる。

②①の存在と貿易陶磁の量から B 1 区は公的空間と考えられる。

③B 2 区では総柱建物も検出されており、倉庫などの施設であったことが想定される。

④館内には鍛冶場が存在したほか、B 2 区では木製品の生産も行われていた。

## 5. 中世朝山氏と藏小路西遺跡

最後にこの屋敷の主について触れておきたい。この館が機能していたのは12世紀後半から15世紀前半頃と考えられる。規模は一町四方の大溝に囲まれた方形居館であり在地領主層の館跡として位置付けられよう。これについて井上寛司氏は「中世朝山家惣領家」の居館の可能性を指摘し、その根拠としては下記の点を挙げている。<sup>(12)</sup>

1) この居館はその規模が方一町という大規模なもので、かなりの勢力を持つ有力者の居館であったことが推測できる。

2) この遺跡が12世紀半～15世紀前半の時期のものであるところから、これがこの地域を知行した領主（地頭）の居館であることは疑いない。

3) この地域は、上記の時期には朝山郷の中に含まれており、上記1・2より、これを朝山氏の居館と考えるのがふさわしい。

4) 朝山氏の成立が11世紀の中ごろまで遡る可能性があるのに対し、この遺跡がそれより約1世紀後の12C後半以後に属すことについては、朝山氏が12C後半に至ってその居館を移動したと考えることにより、矛盾なく理解することができるであろう。初期の朝山氏は上朝山地域<sup>(13)</sup>に拠点を置いてきたのが、斐伊川・神戸川流域の本格的な開発にともなって、斐川平野部に居館を移したと考えができるからである。

5) この居館が朝山郷（下朝山）の東端に位置することについては、朝山氏による斐川平野の開発が東から西（上流から下流）に向かって進められ、その最も上流に位置するところに地域開発と領域支配の拠点が定められた（最も安定した地域であったことも関係あるかも知れない）と考えられること、また、この地域が上・下両朝山（朝山郷全体）のほぼ中心近くに位置していることも、この居館の位置と関係あるかも知れない。

6) この遺跡が13・14Cを最盛期としていることも、朝山氏（惣領家）の辿った歴史過程と符号しており、惟元から師綱に至る時期の居館であった可能性を推測することができる。

7) この遺跡が15C前半をもって消滅することに関しては、師綱の出雲国退去後と若干時期的にズレがあるとも言えるが、朝山氏（惣領家）が退去した後、庶子のうちの誰かがここに居住したか、もしくは新しく幕府御料所朝山郷の管理を命じられた塙治氏、もしくはその関係者がここに居住した可能性も考えることができよう。

8) 在国司朝山氏の居館にしては出土遺物が少ない点に関しては、朝山氏が退去の際に重要な物を全て持ち出した可能性も考えられよう。

9) 三木氏の居館跡<sup>(14)</sup>が近接して存在することについては、次の2つの点で上記の推定と矛盾するどころか、むしろこれを補強するものとして注目されよう。まず第1は、三木家に残された古文書類から考えて、三木氏のこの地域への定住が南北朝末・室町期の14C末以前には遡らないと推定されること。南北朝期の三木家文書はいずれも文書としては疑問のあるところであり、朝山氏の居館に近接して建設されたこと自身、朝山氏の居館の機能を引き継ぐ意味を持つものであったと推定され、この地域が朝山郷支配にとって拠点的な位置を占めていたことをうかがわせるものと考えられる。恐らく三木氏は朝山郷代官塩治氏の配下にあって、塩治氏と協力しながら朝山郷支配を開拓したのであろう。

### 第3節 おわりに

以上、各時代の様相を概観してきた。調査はともすれば居住域の調査にのみ注目されがちだが、生産域などを含め土地利用の変遷過程を解明していく目的意識的調査が望まれよう。今後は更に、文献史学、歴史地理学、自然科学的調査などとの学際的連携を深め、出雲平野の歴史的・地理的景観を復元していく作業が期待される。

中世の居館跡の調査については遺構、遺物とも甚だ不充分な報告となってしまった。遺物については詳細な種類別の点数、機能別の比率についてデータ化していない。居館跡という遺跡の性格から考えても、より精緻なデータが必要と考えられる。今後の課題としたい。

なお、最後に出雲平野の中世陶磁器出土遺跡と島根県の中世墓の一覧表を載せている。いずれも既存の集成資料<sup>(15)</sup>に追加して作成したものである。誤りや遗漏等があればご教示頂ければ幸いである。

註（1）四格遺跡群及び出雲平野の集落の動態については次の文献を参考にした。

田中義昭「中海・宍道湖西部域における農耕社会の展開」「出雲神庭荒神谷遺跡」1996

（2）小山遺跡の花粉分析では微高地が形成されたのは2,450年前とされている。

出雲市教育委員会「小山遺跡第2地点発掘調査報告書」1998

（3）池田満雄・足立克己「出雲市矢野遺跡出土の繩文土器」「島根考古学会誌」第4集 1987

（4）出雲市教育委員会「善行寺遺跡」「出雲市埋蔵文化財調査報告書 第7集」1997

（5）当該地の古環境の変遷に精通している中村唯史氏からは、「平野部の小規模な河道であり増水時を除けば基本的に水量も少なく安定していたのではないか。」とのご教示を頂いている。

（6）広江耕史「島根県における中世土器」「松江考古」第8集 松江考古学談話会 1992

同 「出雲地域の中世土器について」「出雲平野の中世土器検討会資料」1998

（7）飯塚康行「風土記の丘 6月例会発表資料」1991

（8）出雲市教育委員会「矢野遺跡第2地点発掘調査報告書」1991

（9）島根県教育委員会「風土記の丘地内遺跡調査報告Ⅰ」1982

（10）松江市教育委員会「下黒田遺跡発掘調査報告書」1988

（11）峰岸純夫・廣瀬和雄・橋口定志「鼎談・中世居館」「季刊自然と文化30 中世居館」1990

- 橋口定志「中世方形「居館」の形成」『季刊考古学第39号』1992
- (12) 井上寛司「出雲朝山氏と朝山郷について」メモ 1996.12.21
- (13) 稗原地域が該当する。古代の神門郡8郷の一つでもある。
- (14) 島根県教育委員会『島根県中近世城跡分布調査報告書〈第2集〉 出雲・隠岐の城館跡』  
250頁 1998  
三木氏館は出雲市小山町に所在している。本遺跡と同様に微高地に立地し周囲を大溝と土塁で囲まれた、いわゆる方形居館である。
- (15) 西尾克己・守岡正司「常楽寺遺跡と庭反Ⅱ遺跡の性格について」『湖陵町誌研究』第3号  
1994  
南前孝明「山陰の中世墓」『季刊文化財』第84号 1996

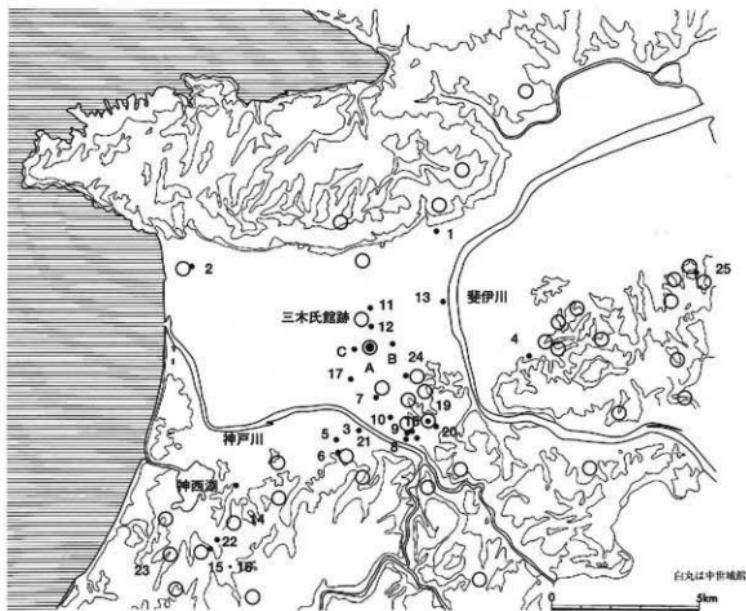


図226 出雲平野の中世城館と陶磁器出土遺跡

付表1. 出雲平野の中世陶磁器出土遺跡

遺跡名	所在地	出土陶磁器	性格	文献
1 龍善寺東遺跡	出雲市西林木町	常滑壺(13c後半)	散布地	1
2 鹿巣山遺跡	大社町杵築南	備前壺・壺・擂鉢(16c)	散布地	2
3 古志本郷遺跡	出雲市古志町	青磁・白磁皿(16c)・青花	散布地	3-4-27
4 後谷V遺跡	斐川町出西	白磁碗	官	4
5 田畠遺跡	出雲市下古志町	白磁皿・青磁碗・青花・備前壺(16c)	散布地	5
6 妙蓮寺山古墳	出雲市下古志町	備前擂鉢(15~16c)	散布地	6
7 天神遺跡	出雲市天神町	青磁・備前・東播系鉢	散布地	7-8
8 三田谷I遺跡	出雲市上塙治町	青磁碗(12~15c)、白磁(12c)	散布地	9
9 半分城跡	出雲市上塙治町	備前壺・擂鉢(15~16c)	山城	10
10 神門寺境内廬寺	出雲市塙治町	青磁・備前・青花	寺院	11
11 矢野遺跡	出雲市矢野町	青磁・白磁・備前・常滑壺	集落	12-13-14
12 小山遺跡	出雲市小山町	備前壺(15~16c)	散布地	15
13 萩杼古墓	出雲市萩杼町	青磁・常滑壺(13c後半)	古墓	16
14 神待2号墳	出雲市西神西町	備前壺(15~16c)	古墓	17
15 庭反II遺跡	湖陵町常楽寺	青磁碗・白磁皿・朝鮮・備前壺・擂鉢(14~15c)	散布地	18

16	常楽寺遺跡	湖陵町常楽寺	白磁(12c)	散布地	18
17	巣丁田遺跡	出雲市白枝町	白磁・青磁・備前・常滑・青花・李朝陶器(12~16c)	集落	19
18	上塩治横穴墓群第33支群	出雲市上塩治町	青磁(15c)	古墓	20
19	大井谷城跡	出雲市上塩治町	青磁・天目(15c)	山城	20
20	上沢Ⅲ遺跡	出雲市上塩治町	青磁(12c)	散布地	21
21	下古志遺跡	出雲市古志町	青磁(16c)	集落	22
22	三部竹崎遺跡	湖陵町三部	白磁(12c) 青磁(16c) 濱戸美濃	散布地	23
23	只谷I遺跡	湖陵町二部	白磁(12c) 青磁(16c)		24
24	藤ヶ森I遺跡	出雲市今市町	備前	集落	25
25	大井城跡	斐川町学頭	濱戸・美濃・常滑系・白磁(15c)	山城	26
A	藏小路西遺跡	出雲市橋渡町	青磁・白磁・常滑・備前・濱戸(12c~15c)	館跡	
B	姫原西遺跡	出雲市姫原町	白磁(12c)	集落	
C	橘波沖遺跡	出雲市橘波町	青磁(13c)・白磁(12c)・常滑・器萬田・龜山系	屋敷地	

文献1 出雲考古学研究会「出雲平野の集落遺跡」I 「古代の出雲を考える」3 1983

1. 大社町教育委員会「鹿島山遺跡」1984
2. 出雲市教育委員会「吉志地区遺跡分布調査報告書」1988
3. 斐川町教育委員会「出雲国出雲郷家正倉跡」1993
4. 出雲市教育委員会「神門地区詳細分布調査報告書」1989
5. 島根県教育委員会「妙薬寺山古墳調査報告」1964
6. 出雲市教育委員会「建設省職員宿舎新築に伴う天神遺跡発掘調査報告書」1982
7. 出雲市教育委員会「塩治地区遺跡分布調査」II
8. 島根県教育委員会「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V 三田谷I遺跡」1999  
このほか島根県教育委員会1994・95年度調査でも出土している
9. 出雲市教育委員会「大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書」1979
10. 出雲市教育委員会「神門寺境内廃寺」1985
11. 出雲市特別事業部・出雲市教育委員会「出雲市健康公園整備事業プロジェクト事業に伴う矢野遺跡 第2地点発掘調査報告書」1991
12. 田中義昭他「出雲市矢野遺跡出土の中世土器」「古代出雲文化の展開に関する総合研究」1989
13. 松山智弘「出雲市矢野遺跡出土の中世土器」「松江考古」8 1992
14. 岡崎雄二郎「出雲市・小山遺跡出土の備前壺」「松江考古」8 1992
15. 近藤正「出雲・萩原発見の骨蔵器」「松江考古」8 1992
16. 川原和人「出雲・神侍寺2号墳出土の備前壺」「松江考古」8 1992
17. 湖陵町教育委員会「庭反II遺跡」1987
18. 出雲市教育委員会「出雲市駅前白枝線街路事業地内 巣丁田遺跡発掘調査報告書」 1998
19. 島根県教育委員会「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書IV 上沢II遺跡・狐連谷古墳・大井谷城跡・上塩治横穴墓群(第7・12・22・23・33・35・36・37支群)」 1998
20. 島根県教育委員会1998年調査
21. 島根県教育委員会「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書IV 古志本郷遺跡I」 1999
22. 湖陵町教育委員会「神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 御領田遺跡 三部竹崎遺跡」1994
- 23.
- 24.
25. 出雲市教育委員会「JR山陰本線・私鉄一畠電鉄連立体交差事業地内 藤ヶ森遺跡(I地点・II地点)発掘調査報告書」1998
26. 斐川町教育委員会「大井城跡発掘調査報告書」1983

付表2. 島根県の中世墓一覧表

300

No.	墓名	所在地	時代	葬法			葬法			出土遺物			参考文献
				墓室	墓石	土壌層	火葬	土葬	不明	古鏡	鏡軸	刀子頭	
1	約場古墓群	松江市八幡町字約場	平安末～様式 (中世)	瓦窓	瓦棺蓋	その他の 瓦棺蓋	1	1	1	○	○	○	鳥取県教育委員会1971
2	◆	◆	◆	2			1	1	4	○	○	○	◆
3	坊床古墓群	島根縣大田町坊床字坊 (中世)	金剛力士以降	1	普通蓋		1						◆
4	河原崎古墓群	安来市吉佐町河原崎 (中世)		普通蓋			1						すべて築石墓
5	馬込山古墓群	松江市西川津町		普通蓋	1		1	○	○	○	木製鏡軸	◇	1号は竪穴
6	王造古墓	八束郡玉湯町王造	15世紀後半	普通蓋	1	五輪軸	1	○	○	○		●	
7	神屋五輪	大東郡簸賀町神屋字原 (中世)					1					●	現存せずし角鏡軸
8	坂瀬塗塗	宍道郡宍道町坂瀬塗	中後期	3	1		4	○	○	○	○	●	
9	中竹矢塙塙	松江市中竹塙	(中世)	1		1	○	○		○	わび	●	
10	二反田古墓	鯨江市新字二反田字塙		宝鏡蓋	6	宝鏡蓋	6			○			松江市教育委員会1987
11	柴尾古墓	松江市上東山津町		五輪等2	(11)		6	○	○	○	○	○	五輪等同2に土器・漆
12	黒田生塙	松江市大原町黒田	中後期	1	2	五輪等軸	2	1					松江市教育委員会1986
13	局坊塙	宍道郡玉置町局坊	室町後半	1		宝鏡等軸	1						石面により墓壁修理
14	板塙工塙	宍道郡宍道町志津見	中世未か (中世)	1	40	五輪等軸	21	19	○	○	○	○	鳥取県教育委員会1984
15	清水日置古墓群	安来市字賀庄村		普通蓋	石等片		1			○	○	○	新潟県立歴史博物館
16	張秆古墓	宍道郡綾町	中後	5	木棺蓋		5	○		○	○	○	東北地方に特有
17	短小鋸西塙	出雲市猪崎町	16世紀	3	木棺蓋		3	○		○	○	○	鳥取県教育委員会1986
18	施原西塙	出雲市施原町	16世紀	1		1					○	○	鳥取県教育委員会1986
19	下黒田塙	松江市大原町下黒田	16世紀	8			8						墓室内に多量の灰石
20	福富1通新5区	松江市乃木福富町	平安～中世	16世紀	1	(2)	○	○	○	○	○	○	鳥取県教育委員会1987a
21	周池塙	八束郡須賀町	13世紀	1		1		○	○	○	○	○	穴掘削部面上に精耕
22	13世紀	出雲市上椿町		2		2	○	○	○	○	○	○	島根県教育委員会1986
23	小庭田塙	松江市山門字小庭田	12世紀	1		1	○	○	○	○	○	○	島根県教育委員会1987
24	西石塙	龜山郡龜山町	12世紀	1		1	1				刀・劍・腰刀・腰刀	●	山原・山原1987
25	梅路塙	宍道郡宍道町	中世後半	1		1	1	○	○	○	○	○	浜田市教育委員会1987
26	奥才谷10号塙	八束郡須賀町	(中世)	2	五輪等2		2						島根県教育委員会1986
27	中尾通塙	安来市月振町	中世	14								○	安来市教育委員会
28	俊尾古墓群	松江市平成町(乃白町)		12世紀	12世紀等	1	(12)	○	○				松江市教育委員会1986
29	市部Ⅱ塙	宍道郡西ノ島町	中世	14			14	○					島根県教育委員会1982
30	上久々賀土塙	益田市上久々賀町		8			8		○	○	○	天日奈浦考古学研究会1984	
31	叶サコ塙	八束郡八雲村	鎌倉	1		1							松江考古学研究会1982
32	矢田第2号塙穴	宍道郡宍道町	宝町	普通蓋			1	○	○	○	○	○	島根県教育委員会1989

中世墓文献一覧 \*副題は省略

- 島根県教育委員会1969 「島根県埋蔵文化財調査報告書」第Ⅰ集  
1971 「島根県埋蔵文化財調査報告書」第Ⅲ集  
1994 「板屋 I 遺跡」  
1994 「上久々茂土居跡・大峠遺跡」  
1997a 「福富 I 遺跡・屋形 1 号墳」 P204~210  
1997b 「島田池遺跡・鶴賀遺跡」 P216~220  
1999a 「姫原西遺跡」  
1999b 「藏小路西遺跡」
- 浜田市教育委員会1997 「横路遺跡(土器土地区)」
- 安来市教育委員会1998 「清水大日堂裏古墓群」  
「中尾遺跡」
- 松江市教育委員会1987 「二反田古墓」  
1988 「下黒田遺跡」
- 松江市教育委員会・(財)松江市教育振興事業団  
1995 「黒田畦遺跡 松江市文化財調査報告書第65集」  
1997 「小無田 II 遺跡 松江市文化財調査報告書第75集」  
1998 「猿尻遺跡群発掘調査報告書 松江市文化財調査報告書第76集」
- 川原和人・桑原真治1987 「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢第18集』九州文化研究会
- 鹿島町教育委員会1985 「奥才古墳群」
- 隱岐島前教育委員会1992 「四引遺跡・市部 II 遺跡発掘調査報告書」
- 宮本徳昭1992 「八雲村・叶ザコ遺跡出土の常滑窯」『松江考古』第8号 松江考古学談話会



# 図 版

## 遺構図版

図版1 A・B 1区全景

図版2~6 A区

図版37~42 C区

図版43~45 D区

図版46~47 E区

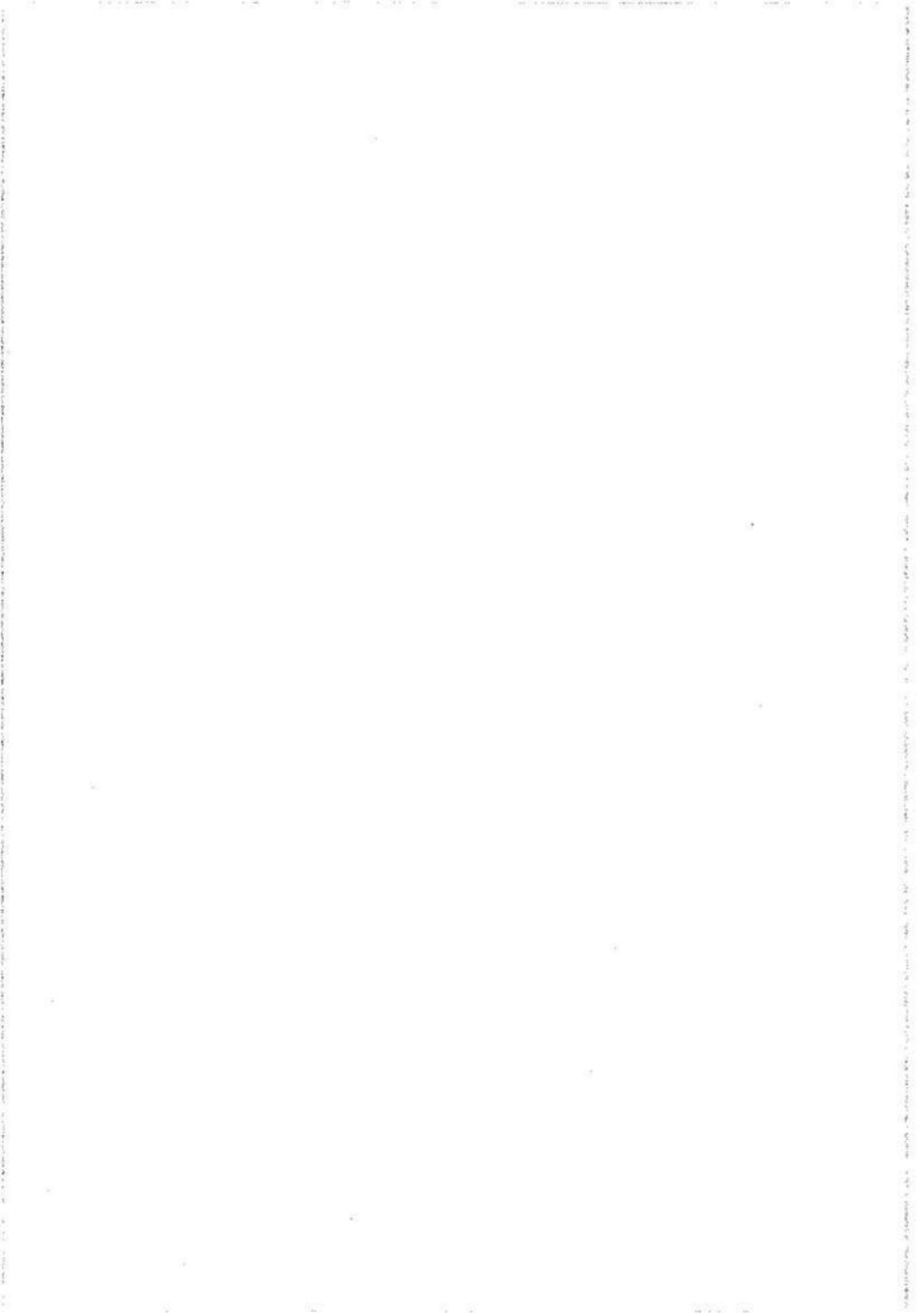
図版48~56 F区

## 遺物図版 I (縄文・弥生ほか)

図版57~66

## 遺物図版 II (中世)

図版67~79



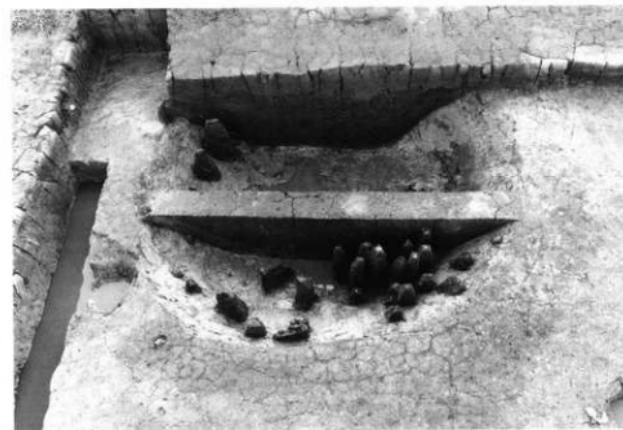
藏小路西遺跡A・B区全景



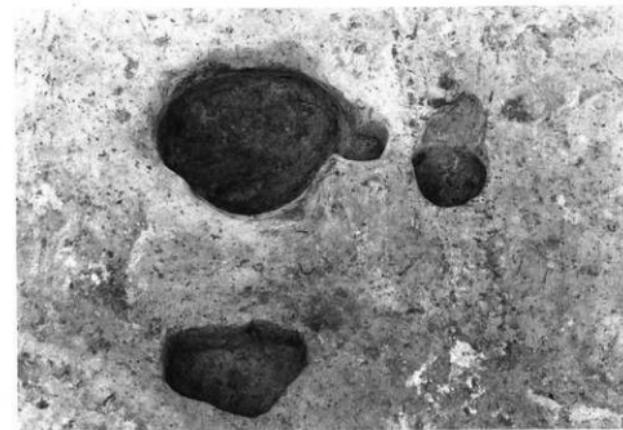
図版2 (藏子路西遺跡A区)



東大溝 (北から)



土坑1 (東から)



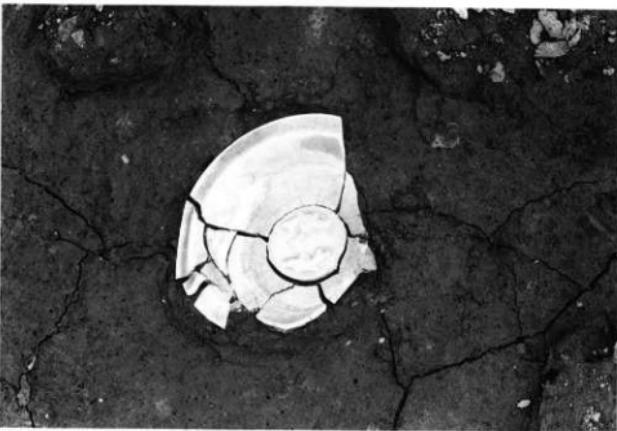
土坑8・9 (南から)



土器溜り (東から)



双魚文盤出土状況



鉄鎌出土状況





自然河道 (南から)



井堰状遺構2 (東から)



井堰状造構2 (北から)



斜杭群 (東から)



杭列造構2 (北西から)



自然河道土層堆積状況  
(E-Fライン)



自然河道内自然流木  
出土状況 (南から)



自然河道内土器出土状況  
(図36-7)



B1区全景

図版8 (藏小路西遺跡B1区)



建物2・4とその周辺（西から）



建物1とその周辺 (南から)



建物3とその周辺 (南から)



建物6の柱根 (ピット783)



柱根 (ピット660)



柱根 (ピット181)



柱穴内の根石 (ピット261・551)